

號月四

宰主*郎路生麻

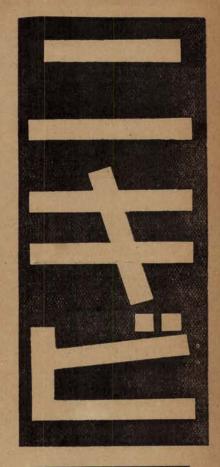


りとびきに

天領派



の等虫京南・蚊・蚤! 時いユカで虫毒



是	吹	11
非。	出	牛
此。	物.	ビ
藥	li	

阪大•京東

館天順谷桃

は古い畵に見るあの反りの打

即ち牛の背骨に向つて右側に

クをつけて双身が辷り出ぬや

の鋭利なもの、

皮の鞘にホッ 双渡り五寸

る。

刀身五寸切尖銳く、

に腕を通して肘の選りにはめ

學生も必ず一本づく腰 白いのが多い。

のベル

てはキャンピングナイフの面

山

登りには女

がないためか、皮の輪を護

を羽織つて居て刀の吊り場

所

1 あ

デン、

フィンランド

へかけ

る。ノールウエー

からスエ

アラビヤ

人の

服装は

度カシミヤ州で購めた刀

111 树川 杂隹 言志 JU 月號目

語 刀

源

冕

回

劍…… 書

西川

商美…(一)

九六才

通信…

大森風來子…(八)

-

(#)

维 求

記

帖

-------福田

安夢…

CIID

	初等川	筆着円波の	武玉川	東京	草木	丧
	川柳講座(二二)	丹波の餅を語る	研究(記)	から	徒 然	H
用ふるもりのた刀身) 麻生			田澱	西田	
たない。 ・握りの短いもの、なりであらう。 ・握りの短いもの、なりである。	路服… (三)		東北 (三)	山雨樓…(た)	神樂: へ	…届中 写

\$

0

がたり……

一笑…(六)

家と農夫の祝………………安川久留美… (三)

角

H

明…

111 近

塔.....

職生路即選…(へ) 麻生路眼選…(一〇

家… (三)

舟

近

詠.....

柳

壇………………………()]

廻轉椅子……… (三)

3

分………………前田

五趣…(三) 弧缝::

川協・柳界展望…(三)

關係の人々……………………………………(三)

脚鹿の

皮

Щ

柳一ト

筋

一笑·香林·幽王

00

柳



劍

随分あちこちと歩き廻つた。 ここでは私の觀た刀劍につい のみ語つて見やう。 の好きな私はこれまでに

土産用に作つてあつたとして 地でもお國それんへの人形が 國の特長が現はれてゐるのは 出來ないがナイフ一つにも其 も郷土色豐かに好みが現はれ あるやうに、たとへそれが御 人形とかメキシコ人形とか内 深奥であつて到底解する事は 刀剣の味といふもの お人形にもフランス

てゐる。 らしく中廣く、 がつ くらである。 る。露西亞の巡査の刀はすば 付けてナイフが二本添へてあ をかぶせた朝に皮の手袋を縫 を打たせてあるから内側に双 た恰好で、 を鍵はめてある。 ふ山刀は青龍刀を小さくし いて居る、 手

後に正面 が左へ彎曲してゐる事である いもの、變つてゐるのは刀身 一尖端まで一センチ巾の分厚 てゐない。只尖端が三角に尖 てゐるだけである。 スペインの闘牛士 タドールの刀は刄がつい から止めの一刀を刺 0) 刀身は 内で最

州アツサム地方の山奥で しかも反對に反り 國民性を表現し 長く重くなま 木のワクに皮 印度ベンゴ ※ 牙や石 切 6 0 止まぬ を割く程度の になつてゐる。 へ刀身の根元を握る。 L たも

に腰に卷いてゐさうなもので てゐて砂漠のパオの中で大切 や紫の絹糸を束ねた房がつい が二本入れる場所もある。赤 眞鍮製の妻揚子のごついもの 部に箸を入れる處がある。 る。蒙古の旅行用の小刀は羊 悍なスペイン人の血を見ねば 尺の彈力のある刀であつて標 に足りない。中指と藥指の間 面白い事にはその鞘の 闘魂に満ちた刀であ が心臓 細身八寸位のも 柄は一ト摑み へ居 長さ三 くやう 叉 うにない兩双の四寸程度。 のもある。 の鞘に唐草模様を入れてある 切れ味もあり切尖が鋭い。 ルコの脇差しは同じ雨刄でも 形だけのもので鋭筆も削れさ あ 度人は蚤も蚊も殺さぬ うにしてゐる。 マ人は支那人と同じ蒙古系で る雨刄の鋭いものである。 鞘に細紐を堅く なものもある。 を貼つた昔の太刀に見るやう のプルガリヤ地方の小刀は るためか凄い ビルマの護身 處がある。 用 鞘に 捲きつけてあ 柳類題索引 は白

持つてゐると思ふと垂れのつ やうに出 に光る髭面が怖い。 を走らす土人の腕に一本づる いた特有のアラビヤ帽子の下 來てゐる。 砂漠に馬

木の

丸

丹波の餅を る **五**

がビ

ル ED

近

小山

ŀ

用ナイフにつけてある。それ 外からナイフが見えな の風呂敷のやうな白い布 タブ 突く 鐵 味がある。 て即席の阿倍川とするの と鹽の利いた黄ナ粉にまぶし 箸にくつ付かないで誠におい あづき饀が少し焦ける位に燎 硬くなつたの を直ぐ様熱い湯に通して砂糖 しいものである。又焼いた餅 い茶をかけて食ふのは、 て茶漬茶碗に入れ、 て濃き醤油をタップリと注け たものは變つた香氣があつ あづき餅即ち牡丹餅の少し 餅を焦がさない様に焼 を火に掛けて其 之れに熱 も風 餅が

等者幼少の頃には餅の醬油 のつけ焼きにしたのを學校の 特常によく持つて行つたもの 特常によく持つて行つたもの 特常に入れる頃には柔くて を學校の机に過して愈豊食を を學校の机に過して愈豊食を を學校の机に過して愈豊食を を學校の机に過して愈豊食を を関には其餅がスツカリ冷 であって、エタ片の餅がく つついて離れなかったり食ふ であったが、朝、焼いて貰って を関では、世間であった。 は其餅がスツカリ冷 であった。 は其餅がスツカリ冷 であった。 は其前がスツカリ冷 であった。 は其前がスツカリ冷 であった。 は其前がスツカリ冷

ので見供にとつては氏神様に 餅を頂いて來たり五月の節句 る習慣があつたし三月の 宛の小餅のお下りを頂いて來 事ヲ司ル當番)から一人に一つ 裝で氏神に詣で、 装で氏神に詣で、御頭人(神未明に一家揃つて紋服袴の禮 しさを覺えるのである。 しみがあつたのであるが今は 詣る事に因つてお餅を貰 ふ樂 には大きな粽を吳れたりした には同じ様に氏神様から雛の 習慣 丹波では正月の元日の も無くなつて一沫の淋 節句

並べて徐ろに乾燥するのであ 薄く切つて米倉や納屋の風 通らぬ場所で茣蓙や板の上に これをゴ入りの乾餅と言ふの 香氣もあつて老幼婦女に愛好 切れが良く、甘味もあり豆の さに膨れるし、ボリボリと齒 を火に掛けると三四倍の大き 思はれる。 は或は丹波特有のものかとも を少し混へて搗いた乾餅なぞ 青い豆の粉を混へ更に黑砂糖 混ぜたり團子の粉を混ぜたり る。乾餅専用としては粳米を せらる」のである。 たものもあるが就中糯米に そして此種の乾餅 丹波では

の園子で作るからであらうか である。 都會では鹽煎餅はあつても が得られないのは全く糯米 の多寡よりも米の粉叉は粳米

等者の書生の頃東京の下宿 ・ 一円波から乾餅が層いたので ・ 一大鉢で焼き初めた頃學友が訪れて、焼く程に悉く其學友が無遠慮に を程に悉く其學友が無遠慮に をでを禁じ得ないものがあ で苦笑を禁じ得ないものがあ

が一番うまいのである事を忘が一番うまいのである事を忘れてはならぬのである事を忘れてはならぬのである。

正月に餅花を造るのは處も がない事であろうが丹波の がたにはムクロジの木の枝を がたにはムクロジの木の枝を がのであつた。

正月二日には伐り初めと言って家々の男が山に入つて一つて家々の男が山に入つて一つであるが此時にも紙の御幣のであるが此時にも紙の御幣を持つて其山の神に供へと餅を持つて其山の神に供へる事を忘れないのである。 「正月の七草粥にも小餅を一番に入れて煮込むのである。」 を開いた米の粥や又はある。 である。

春の菜の花の芯を摘みとつたもの、晩秋に取り入れた大たもの、さては屑大根を薄くだもの、さては屑大根を薄く根や蕪の菜ツ葉を細かく刻ん根や蕪のででまでまる。

乾餅は通例正月の大鏡餅を

待つて食ふに限るし、

人に焼

円波ではオミと言ふ。其内で も大根のオミは甘味があり、 目つ秋から多への空き腹の季 節に暖い食物として乙なもの

最も好む處である。正月中旬まぶしながら食ぶのは筆者の出大根のあたくかいオミを

化棉裳花儿

の甘味と香味が浸み込んで居り、世界には大根ののがあつて、此日には大根ののがあつて、此日には大根の者込みにする。換言すれば大根オミの雑煮餅である。サートリと延びた餅に味噌と大根のは、大くないでは大根祭りと言ふ

るから其好者ならずとも食 菜の花は廢物である。 ある。由來春の菜の花は摘芯 をそ」るに十分であり其道 昔の農家の無駄のない生活に として食用に供するなぞ凡そ をも捨てないで菜の花のオミ のである、だから摘んだ芯の し之に因て茶種の收穫が増す をする事に因て他の枝が群生 人の垂涎を禁じ得ないもので るのである。 りにしたりオミにしたりして を捨てて終はないで之を干切 前に述べた大根のオミにして は感嘆の外はないのである。 我円波の百姓の心掛けがあつ 集一枚と雖無駄にしない處に も土地から得た收穫物は菜ツ 漬けたりするに足らぬ屑大根 も大根の切りツ端や煮たり、 る教訓を與へて居ると言ひ得 て、現代都人に對しては大な 有効適切な食用とし、苟しく 此廢物

二月初午の日には小さい繭 がの風子を造り之を山郷岡の を狀に開いた小枝の先に一つ が入挿す、これが通常一本に 五つか六つの風子を造り之を山郷岡の なるのであつて之を丹波の繭 なるのであつて之を丹波の繭 なるのであつて之を丹波の繭 町、奥力町、等が「番丁」 あつて、昔からの土塀が殘

長町や、彦三町、御歩

なのです。

木町、野町、寺町、等々で 内でも何丁目といふのは材

るのも無理はない、金澤市 のである。私が單に「七ノ ころ丁目ではなく七番丁な

二」と書くから斯う思はれ

と區ぎりされてる、又その

本屋で「明治短附たね袋」

の神棚に置いて繭の上出來を を返す習慣もあるのである 前り養蠶收穫後に此砂や小石 石や砂を頂いて歸つて蠶室 る。此時稻荷さんの御庭の

風情である。

200 ねて雛に供へるのは春らしい 白い餅を作るのであつて紅白 のもの及全く染粉を用ひない 食用染粉を使つて黄色や紅色 大小種々の菱形に切るのであ ふのである、丹波の雛の餅は き上げるので別名草餅とも言 三月は雛の餅である、 蓬の入つた青い餅の外に の香り高いのを混ぜて搗 色とりどりの菱餅を重

> 味覺が强いのである。 がある殊に三月のあられは白 ある。 ゐるから見るからに目に映る 青紅黄とりどりの色が混つて けて煎つたものは一段と風味 れを煎つてあられにするので さく賽の目に切つて乾燥しさ 端即ち屑になつた餅は更に小 りがあつてうまいも いから焼き易く殊に蓬餅は香 そして雛の餅は平たくて薄 菱形に切つた餅の切りツ 砂糖の入つた醬油を附 のであ

る。 の山奥にも見當らないのであ まつて今時こんな悪童は丹波 が今は昔の物語りとなつてし 落すゾと脅迫するのであつた と腰の柳の刀で雛の首を打ち 煎り豆を吳れなかつたりする 吳れなかつたり又はあられ あるが、若し雛飾りを見せて つてそこに供へてあるあられ 煎り豆を貰つて歩くので

親

前田

五 健

香具師連中も其中に交つて盛 驛前にいろいろな

露店があり 今 から數年前迄は、松山

ひ合せて家々の雛祭を見て廻

へた刀を腰にさして大勢誘 丹波の見供は柳の枝でこし

百姓の喜ぶ雨を レンコート をしや灰となってしまつ た友人の勤め先が火災の為 四枚もとめたが預けて置い 郷の別號あり)のマクリを まれてしまつた。其後一昨 年この親和(萬玉亭文は臨 識らず、店頭で何者かに盗 行作を手に入れたが、希望 私が若い時分にも矢張此一 もの(七十七才 してゐた幸塚六幡さんにも 川市に住む久良岐先生のた 掘り出した、細井廣澤の門 といふ紙本幅をゴミ市から 人として蓬筆の人、いま市 か愛敬された書家の一人 桐花集鳳更成儀

飴ン坊 (京魚)氏の 私の好きだつた東都の近藤 といふ一句を見出して往年 町ではいらぬ雨じやけど 中の「配ひ」といふ題詠に

W 3/2

安

III

久

留

美

書家と農夫

の祝

住所を「長町七丁目」と

さし當り「木の新保」以外

番丁となつてゐる。

いて來た、しかし質のと 路郎先生からの通信で私

の一部に、こんな妙な名稱 獲作に思ひ出す、即ち驛前 が殘つてゐる百萬石の城下 のやうである、「金澤はこ の方で丁目の方は素町人町 番丁と區切った町は武士町 んなとこかと木の新保」の 衝を歩いてゐると某る古 と妄想してゐる。 の句が載つてみなかったか ももしや「町ではいらぬ」 つたことがあるから夫れに 氏へ古い「笠附」の本を贈 私が二十六七年前に飴ン坊 はずもがな同想異曲で…… ひ出したのである、之は の一句 メン報?」を對照として思 (川柳春秋掲載?デ

ケット珍本をもとめた、そ といふ浪華諸宗匠撰(明治 十六年二月出版)といふず 川の書家三井親和作の一行 で亡くなつてゐる、東都深 天明二年八十三才の高齢

> 目のもの、私は餘程親和の 作品と深い縁をもつてるや

うよむんだと訳かれた「木 昔路郎先生からの便りにど

> ンに人垣 を作らせて居

やり込める、左官も又敗けて 錬達とて、左官を、ボロ粕に ひが出來、シャツ屋は例の バラと落ち、「コリヤ氣を付 の云ひ合ひで請負の左官と争 けろ」からツィートロニタロ 閑散に見えた店へ、どうし 開かれた。他の店が無い關係 た工合か、工事の壁土がベラ 上、客足も停まらず、至つて ヤス、シャツ店が、一つだけ の空き地へ、香具師の、メリ り替への爲めで、一時場所替 へをした故である。 リ止まつた譯は此驛の壁を涂 出來て居た、それが、パツタ 彼所も此所もと鳴門の渦ほど を釣り寄せ、 など汽車待ち、 の何商會へ注文して下さい」 るが、後々は大阪何々區何 にお安く て行く……今日は宣傳の爲特 強くて鼠を片ツ端から退治し た、この機械は重太郎以上に で賣りつける、こちらでは又 不思議な魚じや」と妙な訛 さあハツ目鰻とは萬病に効く 白銅貨がヒョツコリ出 な此の通り」と扇子の中から 方が稍片付いたので、少し 「岩見重太郎は緋々猿を退治 んと便利じやないか 皆さんにおわけ 人垣は幾重にも 電車待ちの客 數日後、 たり

6 から、妙な具合に事件は展け である。壁土の一つ二つ落下 連中を對手に、張切つたもの 氣滿々であつたから、 その當時の貝原さんは中々活 は罷り相成らぬと申渡し つて今後一 官が來る、香具師は引張られ る、貝原さんはカンカンに怒 た、やがて驛前の交番から警 急回轉人が影が手が足が動い 合で火に油をそ」いだ如く、 貸さぬ」「何を我々の商賣を たと思ふと、調火は燃え上つ 止めると云ふのか」こんな工 んな亂暴者には、此の前地を ない「失敬な事を云ふな、そ と食つて掛つたから、 興奮の火で「課長が何んだ」 したのらしいが物のハヅミと んが、仲裁のつもりで飛び出 社の課長を勤めて居る貝原さ ラパラ、ポン、ポン、カチカ は機關銃の撃合ひの様に、パ が見えぬのかと、やり返 チと、やり合ふ、其所へ其會 なつた。人立ちはする、三人 かと思つたら反つて、左官の す、風雲愈よ急のところへ工 れ 方へ加勢して火の手が大きく 事監督が來て、うまく纒める 居らず、 今は引退して居られるが 營業停止申渡に香具師 工事をやつて居るの 切この驛前で商賣 香具師 たまら

挨拶に來るが貝原さんとまあ が、ウント首を縦に振らぬの 一人、土地關係の小須賀さん み、種々手を替へ品を替へて 連から市の有力者へ仲裁を頼 具師側の申出も仲裁者の挨拶 ドシと設けて行く、つまり香 致上とて樹を植る、柵をドシ る、一方會社側は、 のま」で事件は延びくにな で、片付きもせず、ゴター 前工事が示した、やうなもの も、未決のま」、の解答を曝 驛前の風

具師連中の防波堤とも平穏港 件から、フツ飛ばしたのであ 不景氣のない、一寸の息休め とも見做される土地で、景氣 第である。 さんや小須賀さんに、ヒドイ るから残念であり從つて貝原 なが、この根據地を、壁土事 のも、全く、うなづかれる次 詫びに來た幹部が長嘆息した 分に察せられた。「××會數 と思ふ念が残つて居たのは充 と成りました」とその當時、 十名の家族と私等の生活問題 ヤには絶好の所であるそう 元來松山と云ふところは香

支那事變に皇軍は破竹の勢で ぬ顔で、どんくと流れ進む、 時はそんなイザコザを知ら 撃する、あの町、この村か

> が佇つ、こんな堅張した風景 始まり、 神様へ武運長久祈願の日参が く發つ戰士が日々と續く、 ら「征つて來るぞ」と勇まし の中に、松山から少し離れた 椿さま」と云つて、近縣中で 大祭が來たこのお社は通稱 石井村の伊豫豆比古命神社の で一杯になる。勿論、香具師 ぎつしりとこれ等の店や小屋 農道具、植木など、参道は、 山來る。おたやん飴、延喜笹 人出をあて込んだ興業物も澤 の参詣客の多い大祭である。 街頭に千人針の婦人 居たが、大祭當日の夕方頃、 真砂君の所へ自動車の發車係 員が顔色變へてやつて來て一 て居たので、後方の、ドアが 轉手は人波の前方のみ注視し 外側から開いた者があり、 轉換の折、その俥の、ドアを 回轉すべく、ブウーと、や 開いたのに氣が付かず、徐行

あつたが、その年も果して、 場割には、毎年、ゴタゴタが 連にも最大書入れの大祭で、 號銃かも知れん)をブツ放し 宵々祭の夜、興業師側と香具 等の記事で賑はせた。今から が起り、興業師側が短銃(信 師連側に縄張り場割りで衝突 たので當日の夕刊紙上をこれ

思ふと馬鹿々々しい沙汰の限 替へて殺到する乘客を裁いて ××會社の自動車部主任で、 代である。真砂君はその當時 だこんな空氣の残つて居た時 りであるが、その當時は、ま ハイヤーを政策上、乗合に切 合バス、自動車を總動員して 大祭の参詣客輸送に 頭指揮をやつて居り、貸切 貸切乘 混み合ふ人へ注意して居た事 「こりや何をするかツ」

ろによれば、貸切車を乗合車 客があり、發車すべく、方向 にしたのへ、既に二三人の乘 が出來ました」報告するとこ 主任さん大變です、困つた事 この乗客の三人は例の宵々祭 やら、頬を打たれた抗議やら 會社の奴だろ、承知せんぞ」 親分とその子分であるから、

中の通行人へ當つた、それ つて居た。 を通行人が、腹立ち、まぎれ した、ハヅミカ、硝子に當つ に、力强く突いたのが、どう て、サット血が流れる 破片が乗客の一人の頬 て、ガチャンと砕けた、その ところが開いたドアが混雑 へ當

轉手は吃驚してブレーキを掛 客は外側へ向つて叫んだ。運 を平手でビシャリとやつた。 の伴れがいきなり運轉手の頬 ける、この瞬間、怪俄した乗客 かツ」其所で運轉手も前方の アが開いてるのが、判らんの 婚まん……氣をつけろ、ド 「アツどうも濟みません」

を云ひ立てる、「生意氣な事 云ふな、馬鹿野郎ツ」「×× 應援に來て居る××會の幹部 興行師と香具師の争ひに、

扁桃腺炎

至極、 たが「こら謝つて濟むと思ふ 砂君が人混みを分けて陳謝し さい眼を光らせて「貴様らで 人の連れも梟眼鏡の底から の様な顏して怒鳴るとまあ か」連れの青髯が、かまきり ものより伴れが物凄い勢で息 判らん、社長を呼べ重役を連 れて來い」、肝心の負傷した 事が面倒に成つた、 眞

して居るところへ、

濡れ手拭

いと、自問自答して深呼吸を

卷いた。血はもう鼻紙で押へ 君は同乗して、その車を市の たので止まつて居るが、眞砂 ××病院へ舞らせた。 一二、三日したら癒えます。

事でもない様に、云つて吳れ と看護婦さんは物馴れた、 たいした事ありません」院長 そして叮寧に陳謝したが相變 その車で送り届け、車は返 納まらない、××會の宅まで が、伴れの二人の鼻息は中々 たので真砂君はホット、し らぬなら君の會社に關係ある らず「社長を呼べ、社長が居 して真砂君は表の間へ上つた 次の間から、ゾロく、五、六 貝原と小須賀を呼んで來い」 真砂君は「總て××社の事は 何所へ行つたのか、見えない した、負傷した親分はその時 の名を聞くと、口々に猛り出 名出て來たが、貝原と小須賀 釋明これ努めたが、 さん、小須賀さんの無關係を 私の責任であるから」と貝原 例の壁土問題が、今日の事件 かけてある。眞砂君は思つた 穏かならぬ××や××が立て ない、次の間の床の間には、 どうしても一と荒れ荒れるわ へ、からみ付いた、これは、 聞き入れ

たさうです 者もありまして、

が 御

兩三度つけ 運の强いお

> いた安堵と、 砂君は、 お

今の親分の話と

つも行違ひやら何や

らしもせぬ貝原さんや小須賀 今に何んにも知らず、又た知

傍らの荒れ雲を次の間 鉢の眞上あたりで、カチリと 眞砂君も、ほんの一寸武道の 隱忍解決だと肚にきめ、又得 云ひさうに出合つた十秒…… 改めて大田原親分へ、叮寧に 心得があるので、大火鉢の左 の時は、こうして避けやうと 物で撲られたら、たまらぬそ つ二つ位、撲られるかも知れ 火を揚げさせては、いけない ない、然し撲られても、此の 居た親分は「いやよく判 一砂君の瞳と親分の瞳は大火 利用法も考へて、座に直 真砂君は思つた、これは た」とゆつくり奥ひ煙を がて親分はニツコリして 君の語る今日 をびつたりとしめた、 お喫ひなさい」と云ひ へ火をつけ乍ら聞 鐵瓶、空き座布團 堅張した空氣だ。 親分は黙つて居る の顕末を、

6

L 多

こで、貝原さんも小須賀さん

のです、

世の中が、だんだん

察し考へた通りであつた。

そ

て、もやもやが晴れた様なも

と同

情の挨拶を述べると、大

時

は御迷惑であつたであらう 何の關係もない事、あの當

8

様……あの當時は隨分××會 きく、うなづいた親分は

近々お召で征く者も居ります

互に日本人です

からな」宣

何んだか事件が片付

に居る、

あの連中

の中からも

居ては、いけません、次の 奮やら漠然たる理由で怒つて 變つて行く時、つまらない興

をお恨みしました、貝原さ

んを、やツつけろと云ふ若

記事のアレで、 でせう、親分の話は真砂君の けりや、袈裟までの例への通 さん小須賀さんも自動車には て居ます、あなたの會社と× 座ンして、お素人の考へ及ば 私等連中は一種の義が堅う御 挨拶をしなかつたのでせう、 み合せたのを、察して、あな 壁土事件の、イキサツをから ひやら心配して集まつて居ま ×會社は姉妹會社 たには何んにも今日の事件の で、やかましく、成つたの たので、つまり坊主が僧く 分關係して居るだらうと察 の私等の會員で親分ですが 方面から相當、 團結心と互助精神が燃え 土地の會員が以前あつた 硝子で怪俄したのは×× 御承知 吳、廣島、 であり貝原 仲間が手体 の新聞 もグツト飲み干してから「ま と眞砂君のみど成つた、親分 得物も人々も空になつて、たの間にか次の間の殺氣立つた ど滲み込む様に話せば、いつ ろで弱いもの、いじめに成 が云ふ運 らで御本人は御存知ないが今 あ私達の氣持がお判りになつ はお茶を入れて、す」め自分 ど情感の一室に溶け込む親分 モウ××會社には居らぬ事 時勢の潮流など話し、眞砂君 嚴しさ、 真砂君は、それから、 ぎと云ふのでせうよ」親分と る、まあ何やら彼やらの、 とのイキサツで氣が立つてお いたのでせう、 持ちが、フット今日 に恨んでおりますよ、 貝原さんも小須賀さん 生活様相の變轉から 轉 手を罰し それに興行師

82

威迫の言葉が飛ぶ、全く此際

な言葉を真砂君に聞けがし

やッつけろ的の形勢である。

親會社が、ロ

クでないと、劉暴 大體××會社

す、

原親分が歸つて來た。

「どう

たる、

たのか」水の如く静かに穏

である。これて答へて、負傷

お茶も冷えたましであるこの て居るのか、沈默が、續く、 砂君は各々の思ひに、 かしく成つて來た。 の先きまで、防戰の火箸や鐵 自然に頭が下がつて來る、 さんの事などを、 パが瞬に流れて來た(終 から近い××隊から消燈ラ の利用を考へて居たのが耻 思ひ合せ 親分と眞 ふけつ

現實の

0)

事に湧

その氣

語 源 覺書 (P4)

作るとの考から出たもので月 「作ク夜」の意で月輪が夜をへる。月は松岡氏に依ると 至つたのでないかと自分は考 味の疾シ、疾キと分化し、一 時の意である。 で、ヅェといひ、我國語 朝鮮語でテといふし、西蔵語 てトシは豊食だといふ。 といふ。米穀は年一熟である く時を意味する語から早い意 云ふ。年も時も元はトと同 トシゴヒと稱する所から云つ をトシエズといひ、 から豐年を(トシウ〔得〕)凶年 氏に從へば豐(ト)食(シ)だ 「疾キ」から來たと松岡氏は 何々スルトといふ時のトは 年月日時。 他が時を意味するに トシは松岡静雄 時は「疾シ」 年祭を 時は で今

る。 生はアサ 聯するの 語から起るとい と轉じたのでなからうかと思 たと野崎先生は説かれてあ のであらう。 らしく之に語尾ルがついたも 十日 トバを使つた所が古文にある ふ。アスはセム語で黎明、 たといふ意のアケヒからケフ ヒからキノヒーキノフとなつ あらう。 たもの又はルは單に接尾語で である。 日は太陽(火)と關係 月は地球の附屬物だからツキ に盈虚があるから盡きだとか アイヌでチュ のが月輪を先づ意味し次で三 といふ。それからツキといふ だとかいふ説は賛成し難い。 上でないと断定は出來ね。 キの轉呼かも知れないの は日に次ぐからツキだとか ない夜にもツクヨとい ケフ 意だといひ、 關係國の の月を指すに至つたとい 0) アス、 關係がある様だし、ト 蒙古語でサラといひ、 鮮語で tar 西蔵語でダ 夜は支那音から來 かも知れぬが野崎先 はケフ(日經)だと松 晝は日アルの縮まつ アサも此語と闊 自分は日が明け プとい 丰 古文献を調査 ふ説があ ノフはサキ アジアは此 ふのとも 0 する語 であ る。 月 月 0

のも同

源である。

ね

はアサの轉呼であると片

は蘭語ゾンダーク 蘭語ダークとなる。

はアサの延長であり、

yeuといふさうだから、之等 と一連の關係があるらしい。 7 るかも知れぬ。月は希語メー 支那の年の音も之と關聯して year, hour獨の jahr, uhr な あり時である。 脳語の hora は年であり春で ついて検討して見やうなら希 れも首肯し難い。外國の語に ョウベの轉と稱してゐるが何 た語でユフベのフは音便上入 野崎先生は寛方(よべ)から來 ナパークなど我國でも一般に けて ら伊語ジョルノ、佛語ジュ 6 ふメンス(月經)となり、 せとなり、今は一般素人も たと説かれて居り、 ルーナ(月輪)となる。 **羅語メンシスから伊語** れてゐる。 語でもユブ、 マライでユプといひ、 れるがケが略されると 居られる。然しアケサ 英語デー、 ナ(月輪)から佛語露語 といふ語 羅典語annusから佛 難い。ユフといふ語 トとなつた。一方羅 伊語アンノとなり 日は羅語dies 之より英の 獨モンド、 の出た事は 獨語ターク 契冲は

る。

伊はノツテ、佛はニエイ

れ

ね。夜は羅語 noxから獨ナ

ハト、英

ナイトとなつてる

支那音も之と關してるかも知

デ小夜曲などとなる。夕の のソアールとなり、セレナ

佛

晩いといふ語から伊のセーラ

ンドとなつた。 ヴニングとなり、獨の

羅語セー

ス

ペーラから英のイー

・ヴ、 アー ルム

1

ゐるのであらう。夕は希語

である。獨モールゲンは明日

でもあり朝でもあるのはアシ

ツーと結んでツーモローとな

丹

の如くモーニングの前半が

之と 闘聯して ゐるかも知 轉呼である。黎明を英語でド でニーといふのも之から來て 吳音もその轉音で西藏語 獨語でテーゲンとい 日の漢音も ことである。 セコンドは第二のといふ意 間より少い單位を意味する。 るに至つたわけである。 之がセコンド 二の少くされた單位といふが 分よりも更に下の單位とい un minuto secondo 第 伊語では秒のこ だけで略稱され

夢 8 0 がた 1)

夢にもよりけりであると思 ものと云はれて來た。 あるとされ、叉睡眠を妨ける は身心が疲勞してゐる證據 地からすれば、夢を見ること 由である。 たがつて、夢を見ることは自 られた一つの特権である。 い夢等々……夢の世界もいろ ふ。樂しい夢、悲しい夢、恐 夢 有る。 は 我々生あるものに興 しかるに醫學的見 それは

のか。これは我々大人の頭 夢とは リと微笑んでゐる事が有る。 有る。其のいづれにしても、 怖に滿ちた泣聲を立てる時が そうかと思うと、又不意に恐 る可愛い顔が、時にはニッコ 知つた。すやくと眠つてる ン坊が夢を見ると云ふ事實を 私は最近、 間もない赤ン坊が見る 體どんな世界である 生後間もない赤

羅語 vices 交代といふ 意から

0

がドマーニといふ。伊語明

で之が佛語ジマンとなる。

即英の week獨の wocheは

なりモローがマーニと變つた つて明日となる。ツーがドと

七つの 來たらしく

朝といふ意で之が匍語 ナ佛語スメーヌとなつ

伊語 settimanaは

七

滅らされたる」の意で一時

分minuteは羅語minutus

はとうてい理解出來ない な問題である。

車で街を走ると見れば人に嘲 見れば悪しきこと有り、自動 ばよき事あり、 占ふ夢判斷と云ふものがあつ なりし時代、夢に據て吉凶を れば人の上に立つ事有り、 笑さるべし、汽車で走ると見 た。例へば、山へ登ると見れ しいかぎりで有る。 迷信もこう迄行けばはなはだ あるが、人の弱味につけ込む ど其の他いろくと記されて 今は昔、それは迷 山より下ると

もわかることで有る。

逆説であつたりするのを見て が多少變つてゐたり、時には 證據に、地方によってこれ等 が如何に迷信であるかと云ふ

火事の夢も同様に云はれて居 ば蔵が建つのも譯はない。 た事はない。もし事實であ よく云はれるがこんな馬鹿氣 けない大金がころけ込む、と 人に告けなかつたら、思ひが るが、これは煙が上つて 古來蛇の夢を見て三日以上

も火の手はさかんに上つてる その家に移つて行つた最初 て獨立營業した時、 ふ説がある。私は神戸で初め 手が上つてゐる方がよいと云 る方がよいと云ふ説と、火 夜の夢が火事であつた。 夢はさか夢とか云ふが、 しかし開店後何かと思は わずか一年の後 新らし L 8 り。走らんとしても足がもつ と思つても一向しやべれなか つたり。思ふ存分しやべれた

拾つた夢など、なほさらであ い夢の方が氣持がよい。金を い夢を見るより、樂しい嬉し はり悪夢にうなされたり悲し 夢判斷なるも

さめても後口が悪く、いやな る方が、をしいけ に手をつけんとして目が覺め に並べられた御馳 食べても味がないのみならず あまりい人感じはせぬ。何を ものである。それより目の前 御馳走を食べる夢、 走に、今將 これ

夢や感激的な夢や、 ず泣入つてゐる。 思はれるほど、身も世もあら 悲しいことが又と有らうかと ことでも、夢の中ではこんな そうかと思うと、 のちにも眞赤になる様なはつ く、心の底から泣くことが出 てから考へれば馬鹿け かしい夢を見ることが有る。 悲しい夢を見た時、 又、時には素晴らし しやべらう 實に氣持よ 目覺めて た様な 目

熱に苦しんでゐた。すると、

いてゐたのであろう、ひどい

覺めてい

、そのましそれを實行

命じられるま」に一旦夢から もりなのに、あの黑い悪魔に

に移した。そして母の言葉に

一度ハツキリ夢から覺めた

るが、これは、亡くなつた人 その くなつた姉の夢を時々見るが 私は今から丁度三年前の春亡 なつてるて自分の心からはな 人の事を死後次第に思はなく かつたのか、或は、かなり親 と生前あまり親しくしてゐな のを言はないとかべそれであ 睡から覺めてゆき、それと共明方に向ふにつれて次第に熟 れて行つてゐるのであらう。 ハッキリと見えないとか、も 云ひ傳へがある。足許の方が それが往々にして事實に當る た夢の上に働いたとすれば、 つらくとしている明方に見 ものがある。 靈感とか、又は第六感と云ふ つらくとしてゐるのであ 眠る真夜中である。それ以後 俗に丑滿時と云はれる草木も 朝六時に起きることになる。 するなれば夜十時に就寝してば、普通睡眠時間が八時間と れなかつたり、又案外氣持よれて轉びつまろびつ、一向走 に周圍の物音などのため、 く走れたりすることもある。 こととなる。 かつた仲であつても、その 又、死人の夢にもいろんな から覺めてゆき、それと共 はれるが、これはまんざら 一芸砂傳へは當らない。い 人間には誰でも豫感とか 方の夢は正夢であるとか 中一番熟睡出來るのは、 ではないらしい。例へ これ等がそのう つ、一向

の筋害は知らぬが、夢を前篇云ふ人がある。どんな夢かそ云ふ人がある。どんな夢かそ とがあつた。多分風邪でも引 と後篇に分けて見るなど、 が常に想ひ悩んでゐることや て く必要は んな人は映畫や演劇を見に行 よいと乙な話ではないか。こ 滿足出來るか。 である。しかし大人がそれで なる程、これは子供への名答 ゐる中に見るのだと答へた。 想像してゐることを、眠つて 寫眞のとほりであつた。 それはまだ父が 或る家の子供が父親に 私は不思議な夢を見たこ その父親は、夢とは自分 なぜ夢を見るのかと聴た 床に居る 向 ち

に一度か五年目に一度ぐらひ父の夢を思ひ出した様に三年 も言葉をかけてもらつたこと に語り得るなど、夢でなくて亡くなつた人に逢つて互ひ 繰返して云つた。仕舞に五月 はいつ迄も執こく同じことを 來なかつたけれども、 きてお前のお父さんの腹てる むくて中々起き上ることが出 る様に云ふのである。 る周りを廻つて來い、と命じ 起きろ、早く起きろ、早く起 い大きな眞黑な人が、起きろ 私の枕許で顔も形もわからな 黒い人

嬉しく、又大きな心の糧とな この姉の夢を見ることが一番

は出來ないことで、私には、

様な氣がしたのは、やはり

はり

近しばく一空襲の夢を見るこ

る。時には雨と降る焦

る様になつて來た。

かなら

の中で、

勇ましく働いて

てゐる自分を見ることがあ 爆弾が命中して、一瞬爆死し

ゐる自分であつたり、時には

る。この夢は、空襲と云ふ恐

3

のである。それと反對に、

のや」と笑はれた。父は知つから、「よんべねほけてるた られた。そして家族のみんなまつた。翌る朝、大そうじか 分の寝床にはいつて眠つてしした。そして、そのまゝ又自 た通り、私は病人の足の方かなのに、尚その夢に命じられ ツキリ夢から覺めた様な氣が しなめた。この時は、更にハ 不意に母が何か云つて私をた つた。その半廻したところで ら、次第に枕許へと廻つて行 つた。この時、 蠅くなつて來て、私は起き上 心は確に夢か 私はね の種の夢を他人も見るのだと 説に書かれたものと思うが此 説に書かれたものと思うが此 やれ、獏にやれ」と云つてくて泣いてゐると、母が「獏に やはり黑い大きなものが出て正宗白鳥の地獄と云ふ小説に を思ひ出す。 くなり、ますく一泣いたこと まほろしを想像して一そう恐 又その見た事もない狭と云ふ れたものだ。すると、 私も幼い頃よく悲しい夢を見 夢を喰ふ動物と云はれるが、 云ふ事實が最近わかつた。 きであらう。これと似た話で つたが、これは悪夢と云ふべ の後いつとはなく見ぬ様にな ず夢に現はれて來た。この夢 は大分大きくなる迄見た。そ 7、彼の黑い悪魔は、 支那に獏と云ふ獣がゐる。 その後も熱を出して臥込む

るを思ひ、夕べに何事も無か

はせぬ様に常々、朝に空襲あ てあわてたり、見苦しい眞似

ゐる。これが、その夢を見る つた事を感謝することにして

一ツの原因であらう。そして

が、私は一朝事ある場合決し

後を戒める言葉に外ならない ものと覺悟せよ」これは、銃 無い。「空襲はかならず有る 怖感から見るものでは決して

いつでも、唯一枚殘つてゐる又、夢に出て來る額かたちは

くなつたので生前のことも別

はない。父は私が八ツの時亡

見ることがあるが、未だ一度

にこれと云つて記憶はない。

は院入御一 ←ず應にめ需

く亡くなつた。あの時の私は

ねほけては居なかつたつ

はあるが、父はその後間もな の夢と何の關係もないことで 氣持が悪かつたと云つた。こ

のする事やと思うても、夜中

云ふ言葉が内外共に叫ばれ

十二月八日以來、

本土空襲

てゐたらしかつた。母は子供

谷 小

大阪市港區市岡元町一丁目(電車道) 電話西八四 Opu 病 三八七一

院

谷 內 與 郎

體學博士

も科學されない大きな謎の世界は確にあ 界である。 ど、正しく千金に値するもの 勇士が故國の母の夢を見るな これは戦争がおしへた新らし であらう。 い夢である。又、遠い戦線の 死は夢なりと詩人

今度は

7

番

こ生僕世友 債青內女あ洗 3 3 E 界 達 券 年 助 立 面 似地 な ち # 器 T T 0 話 か 方 3 友 \$ だが微 食 < H 6 け 應 料 風 盲 0) 達 本 呂 目 0) 5 か 2 Ł H 6 聞 < が 張 # 6 T ゆ 3 電 0 0 3 す < 話 が りたる 0

郎

す 0) 0 6 娘 產近 3 3 本 0) 髷 ほ ٤ 雨 雨

赤橋陣辨重

T

出

T

見

立頭當役

配遠ほ

給 緣 7

米 泥 轉

英 齊

似

3

П

よ

路

手產 働

0

將

る

0)

柄

趣 で 3

味 大

あ

0

九

院け

有

0

女 都 H 鑵 事 は 務 茶 叱 鋪 满 れ ば 休 # T む で 手 雜 6 草 忙 使 は 生

す な、 貯 0) が 通 凹つ ソ ツ ts F 見 3

へ屋 丹社足 手 前長 0 辨 か 所 は Ł 吳 云 ひ れ 太

古

0 0 2 T 算 床 盤 お で 0 < T ナニ で

風

ts

0 邪

軍秘 煙 用 密 草 車 室 音 な H 3 街 ラ 0 忘 れ 角 3 女 0) 3 兒 0) な

6 送 0 7 盃 <

雪

け

X2

夜

6

郎

は何事もなかつたが、

消燈ラッパが鳴り慶に就いた時まで

く頃ともなれば、

猿君何音ならんや

兵隊の肝をか

んだのでさあ大變、

悲鳴?を上げた

わつとばかがに飛び起きてし

腰床へ入り、肝の發聲元、鼻をつま と兵舎に進入、蚊帳をめくつて更に らく枝をゆすり、それから大地をよ

間もなく日が暮れた。

猿君も解放されたうれしさ、

から枝をするしくと逃げ廻る。 出て追ひ廻とましたが樹から樹

無お

闇前 間

矢を

つ失敬して、悠々と闇に消える。 はかり全員非常呼集ならぬ騒ぎ、

見 0

2

時

暑いといふ言葉を忘れてしまひまし ことと存じます。ボルネオの兵隊は しい内地の皆さん御壯健の 大森風來子

想ひ得べただけでも身の毛のよだつ 暑さ向きに出來上つて の下で氣持よく暑いコーヒに舌鼓を た。「虚變れば品變る」内地の冬を 打つてゐます、僕達の慌はすつかり ても冷コーヒはないし、 た。こちらでは鐘や太鼓で探し歩 しまひまし

出て追ひ廻とましたが樹から樹へ枝始まつた。さあ大虁と四五人兵隊が 樹につないであたが、 買つたものらしい、勿論紐をつけて 匹ゐた、誰か小鈴を與へて住民から 舎で、兵隊に愛嬌をふりまく猿が れ、猿君のそり(くとひとり歩きが 慰安も娛樂もない椰子林の 或る日細が切 中の兵

水

Œ

石 爆 商 麥 轉 脈 往空物百 即 い袖丸増金 春春眼小隣 春 飛 天 鹼 壓 賣 業 8 診 腹 が 圓 製 0 П 刈產 銀 のの帶 使 席 風入 6 を 7 芽 握 0) で よ 札 2 2 歸 のの増 糸 草川 0) が 松竹少女 米田春童君の轉業に與ふ 三月五日恩師急逝さる 6 31 離 E 步 步 3 で あ 恩 干 子 角 せ 2 U れ 42 < 臺 るは師 此 物 ス 子の す ひ ず T T 鐵 船 3 Va を 處 で 逆 を で 0) 强 が 鼠 か に 來 板 か す病 金 3 立 恩 あ 0) 8 3 る 積 慰問より 港 で 當 が te る 5 師 み は 寒 闘 快 0) で 前 B 立 吹 3 な 酒 E ば L 感 逝 効 重 送 40 が で 0 T 6 手 < を か 3 か 淋 君 3 理 る な を T せ ゆ 日 あ す Ш 洟 0) た 82 P 出 H 3 出 3 きひ 6 を か ま P 知 t= 敷 T 3 H れ L に 不 む方 7 3 T 地

巢

防席 孫急 轟 幕人草二 大ふ春長 何薄奮割犬 新一時 たた水蝶 で行 讓 沈 ゆま 6 月 阪るの女 起勘捨 が 弱 世 周局 んんす三 堂冬にさ街な 壕 3 くば木 6 0) Ł 3 な L 忌 T 帶 ほぼま 0 芭の住と一り 鼠 3 客 度 S. 5 专 T 意 て言 る 代 田に ぼぼし巴 常 力 東 と等に 大枯 蕉奈んの人 そ 配 志かへ 話 用 舍 の目に 條 3 Ŧī. T の夏で鳴木 給 6 らば其 釜 のだ 新 F * な 方 わ 何 目 門炭 0) T を 同 0) を 親 あ 圖 で ひ 华 な 0 U ば 若バ EH あ 無 志 h 6 蛙 t T 6 音 0) 40 歸 冷 L 0) か 布 ス 201 T ま が せ 似子 75 3 を 3 を \$ 3 6 が を 破 額 る 等 顏澤 聞 鹿 知 古 肥 Ł 待 げ 6 煙 で去 9 居 Ł 18 車 畫 山 < 0 0 都 克 70 < 餘 草 T な 1 た 云 殘 3 ま 3 0) T 0 む * しふ市 H 0) L 6 Si 6 # だ 2 拖 冬 來 6 0 が 値 # n 廻 帶 るれ 47 居 6 逸

らぬうちに段々よくなつたのであり を堅く縛る習慣をつけたのが胃下垂 ますが、今から考へて見ますと、 腹が癒つたのはいつの間にやらわか く頂けます。感謝しております。 を防止したのではないかと思ばれま 度々々の食事がこの上もなくお したが、その後お陸様で健康舊に復 膨を思つてゐたので御心配をかけま 頑健そのものになりました。三 京 ムつたときは恰度冒 か 田山田 6

か猿君はなぐられたようであるが、 それを見て審つてたかつて、したた 明したのか、一本のパナナで猿を呼 の下しようがなくなった頃、 ひよせ悠々と猿を釣ったのである、 ン差からペン軸や鉛筆をかつばらつ 衛兵にその由を申送りそのまゝ腹に た猿君、朝日の映える樹の枝で悠々 し僕を見下してゐる。 それから二、三日、 この騒ぎを他人事のやらに聞きな 事務室(二階)のペ 猿には全く手

なぐられたその日から猿君は大好物 毎日愛嬌をふりまいてゐる。兵隊に 今はまた同じ樹の下で紐につながれ

花

香

オ製サシミの相異點 日本製サシミとボル

釣竿をかつぐのである。雛語がなく 日く、日本製サシミは兵隊の手でと り日本の翻詰の食べ残りを餌にして なるとボナナを代用品の餌にするの たが兵隊は針ピンを曲げて釣針を作 市場へ行けば何時でも魚は買へる これがボルネオ製である。

ど電叱神俺忙 兵煙 厚先鏡 會ま 同半 增肥畫轉 學も朝 滿 こ丸歸 の髪ら社の中 歴う鮮 場ま 隊突 生量臺 仙の刈還 じ平 産を休業 員 草のれ昇子閑 車はが で織錢の兵 のが 趣太新 のやみの の齢へ をご 車 何何ぐ も見る格に子 結物が鴨何 ささ立 貸と 笑目、 味死國 響る壽引 き 粉が 特に 兄な月 野指献居ん 兄な月 形全に とせ生 お合焚人生の 處をら しも ひざ 徹父司越 す孫つ れ へぐつ い二火類れ算 てガ カわ 夜~屋先 がの日 り京行づいずし度へどた術 な布を生とある大のて の子のは西 う守人 京司ス尼 T 即い目町も運を 方施や産なわ云阪 なで夢 空供や言言 事も會のを解 づも類 るやは をはめう 貯る Ł 依限 にそ長許くい 衝うたて谷 くしま 初つず武岩ぬ 金子 し 林 そ しれも可んて 賴知 事よれ きれ噂來 3 す澤 か さつ 0) 部る事 をうる てつ居がでや しきず 話きり要やり がし 040-10 うま V 的 休

終下年陣 竹不 飯奉春吹 目文セパ大 鮊馬堂雜老賈 電駄だ頭 に見 憂公の雪 の樂がラ聲 子のビ誌秘々 に替ナ指 し識 で袋雨す の脚ル社書が胸の金 前はまソで 妻還寫る に丸つ でいれルラ 立ヘア揮 たま 酢騎にのとど つてとそ 垣だ のら真北 出ぢてでツ の兵風窓言ン 集ね一心 き伍をにはと 子其思れ しめ親隱シ 山書覺葉す 1長除消れあ收口收太 をれふか思 たる爺さユ 母か齒ら崎 阪名や三にに阪 過でけえ硯が 刺う人や話 はら醫社 ぎ出ててがつ te 又一者長長 の資 枚もか柩 をに風なす た征るく減た 案人に風谷 なお呂ら四 二す靴春つ父 け 永じ友通を川 元ぶ解へぬ十 直のての 終 階 一がふ引 ら儀入額過 のし雪る像 吐れされでぎ 出日き 3 灯 來力

モ春立4 稅族 ン風看 金歸 べだ板 も刈い だを 撃のに ちまこ けつ て」れ版足け ら先 し行で 止きも八 为汽 三車 ままか むせと to 寺

程度止むを得ぬことかも知れませめ を顕みて照愧に堪へませんでした。 を覺えました。そして小生の川柳熱 國、松隆先生の殉國精神が今尚脈々 して只もら感謝の外はありません。 道川柳人の溢れるやうな御熱意に對 のある事を誠に申譯ないと存じてお 愛を持ち続けた事と思ひますが、 指導御鞭撻をうけて昔に劣らぬ川柳 小生も大阪にあれば親しく先生の御 か本営は責任感が足らぬからです。 として國民の間に残つてゐるやらに に取紛れともすれば川柳を忘れる日 くはなれ、且又職業もかはつて多忙

腹を緊迫するので一見よくないやう うこれが習慣となりまして一日も離 さず使用してゐるのですが、これが 快よくありました。恰も力士のまわ 相當堅く締まるので腹に力が入つて 巻いて見ました。この帶は締めると 確かによかつたやうに思ばれます。 しのやうな感じであります。とうと 木綿の破れた事をよろこんでゐる程 に考へられますが、却つて腹がふく 」稚帶)をシャッの上からぐる!

蛙

が現れるまで英雄の打ち止め

(三二)ナポレ ナポレオンの性格 戰爭史 才

ヒットラーやムツソリニー

世

戶 H 孤 箻

匂を香いだフランス人が祭り れる勇七智三の猪武者。 な存在。狂犬にまでたとへら 上けるにはもつてこいの派手 の様に思はれてゐたナポレオ 恐怖政治で浴びる程血の

王黨先ず倒れ、

温和派ジロ

代

不可能と一緒に徳もにも かず

兇双に刺され、ダントン又ギ 少女シャロット・コルデーの はジャンダーク氣取りの愛國 ロビスピエールあり、マラー ベンの中にダントン、マラー、 ント黨追はる。過激派ジャコ

チンに消ゆ、最後の一人口

ツーロンの戦

こそナボレオンボナパルトで る日がおとずれる。その太陽 りはじめて佛蘭西に太陽の服 ピスピエールも同じ運命に終

暴君の一人風呂場でころ

砲煙の消えて奈翁のまだ

少將に進級する。後、皇后ジ もこの戦 ヨセフインにいやがられた疥 られたツーロン港の危機を救 ンス革命の末期、英西に攻め る戰爭史からはじめる。フラ を一砲手から傳染されたの 一砲兵大尉より四段跳んで ボレオン史の過半を占め

兵法の一手を見せただけ

ですみ

革命時代侵入して來た墺太 イタリー戦争

> 突進したロデの冒険。 千對六千の寡兵を以てホー河 面軍司令官を拜命して豊萬六 利への復讐の緒戰に伊太利方 (北伊)の橋梁を先頭切つて

御自慢の戦であって非難

エジプト遠征

身を以て巴里に還る。 るネルソンの包圍網を突破、 海軍はアプキール灣に慘敗す 奮闘を見てゐるぞ」との名言 現れ、「ビラミツトが健兄の ボレオンの兵法に方陣の名が 帝國を夢見てエジプトへ。ナ キサンダー大帝を、ローマ大 さい耳目をのがれ、昔のアレ に引掛つて雄闘をはざまれ、 をはく。併しアツコンの要塞 木には風當りがきつい。うる 出る杭は打たれ、曠野の喬

强がりを言ひ言ひ逃げ路

マレンゴーの戦

か人ける。 と云ふ塗りつぶしの大看板を 多分の投機性はアルプス越来 再び墺太利征伐の師を起す。 る。その地位確保の必要から な民衆の人氣は彼を統領とす 敗軍の將ではあつたが案外

ブリエンヌ時代の地理が の眞似もする モン・ブランの前で曲馬

役に立ち

(註)プリエンス兵學校に一〇歳より一五歳まで

レオン帝冠を戴く。

退陣は帝王らしくない早

SAAAAAAAAAAAA

會戰。此年衆望を擔つてナポ

て露帝及墺帝をアウステリツ 決まるとあつさり廻れ右をし 軍はその企が畫餅に歸したと

チの野に敗る。世に云ふ三帝

トラフアルガーの

残してしまふ。 とトラフアルガー沖でたくき が弱いのではお話にならぬ。 陸がまだ出來ない。ナポレオ つぶされて、解けざる宿題を よかつたが、ブルードカン 追つかけごつこをしたまでは スペインと組んでネルソンと みたが餅屋は餅屋、その海軍 ンも糞ジョン・プルと力んで 入る所に居りながら英本土上 今日獨逸は望遠鏡の視野に

越

| 三角尾馬角は | 100円 百百百百百百日

英佛海峡まだネルソンの

情解來な

MANANANANAN



泌尿器科・皮膚科 大阪高麗橋 北濱華陽堂病院 ◇移轉改稱◇ 電話北濱一五六五

11

しても、この句の寫生味と穿

寒念佛みりり(とある

料理人すとんくとをしげ これを巧みに使用いたします ります。 する道具に過ぎないものとな ことになり、句の價値を減殺 徒らに無駄な文字を挿入した ことが出來ます。それが剴切 と、内容をウンと飛躍させる でない場合には十七音字中に

古句に、

と云ふのがあります。この句 そして擬聲語の多くは副詞で 語とも寫聲語とも云ひます。 音を摸した語で、これを擬音 はどんなものかと申しますと の中七、すとんくといふ語 摩語の句と呼んで居ります。 を構成した場合、その句を擬 ありますが形容詞である場合 物體の響く音や、動物の鳴く のやうな擬聲語を用ひて、句 であります。では擬聲語と かし無闇に擬聲語を使つた 右に擧けた「すとんく」 「すとんく」は所謂擬整 構成を非常にリズミカルにし 働きをしてゐるかと申します けなし」といふ句に、すとん ります。そしてよいとこだけ 際のよさが想像されるのであ の庖丁の切れ味のいかにも手 響を與へて吳れます。又すと てるます。從つて耳に快よい と、この擬聲語によつて句の くといふ擬聲語が、どんな であります。所謂人生に觸れ も出てるて、頗ぶる輕妙な句 まうやうに思はされる滑稽味 あとはをしけもなく捨ててし をすとんくと切つてとり、 んしくといふ語には、料理人 一料理人すとんくとをし

> 人なら誰にでも通じるが、萩 語「ワンイー」の如きは日本

時計のゼンマイの戻る音を、 原朔太郎は、その詩の中で、

臀語で表現してゐるが、これ ・あん・じやん!」といふ擬 一じほ・あん・じやん!じほ

などは萩原朔太郎の創作の擬

ともあります。

からと云つて、いい句が出來

何だとか、觸れぬ句だとか

にそう感じられる譯のもの

のものでもありませんが

ち味とには何んとなく葉で鮮 この句の妙味の發源體が擬聲 といふことを知ることが出來 に大きな役割を果しつつある すれば擬聲語が句の構成上實 語の「すとんしく」であると の用ひ方によつて、それん 擬聲語そのものの意味と、そ もあります。何れにしても、 あり、又感じを強化すること が、皮肉味を強化することも 味を强化することもあります 聲語によつて、寫生味や穿ち 理人」の句の場合の如く、擬 るのであります。そして「料

あります。しかし、擬聲語と 異なつた性能を發揮するので いふものは、誰にでも一様に はれるのであります。

の中七「みりり~~と」の中處にあるかと云へば、この句 感覺の持主ではないかと思へ その境地まで私たちを引きづ の姿をまざくと見せてくれ 深夜薄氷を踏んで行く寒念佛 感じさせられます。そして、 るのであります。一讀寒さを などは萩原朔太郎にもまけぬ ればそれほど强く感じられな この「みりり~」は人によ にあるのであります。しかし にある擬聲語「みりりく」 つて行きます。そんな力が何 い擬聲語ではなからうかと思

三の絲ちりちりちりとど

りますので、ある人たちには 聞えるものではない場合があ

たちにはピンと來ない場合も ピンと來る擬聲語も、ある人

あるのであります。犬の擬聲

心情いまでに樂々とした叙法 しても調子外れになるものな りの擬聲語が一句を貫くいの せう。この句も又ちりちりち 技巧の好適例句だと云へるで たいものであります。「ちり あります。寫生句は斯う詠み ので、このやうに詠んだので ぬのが三味線であります。 かにも彈けそうに見えて彈け ちとなつてゐることを見遁す ではないでせうか。無技巧 これも古句であります。い 0)

て檢討することにいたします を列擧し、その一句一句に就 次に現代作家の擬聲語の句 すたすたすた朝刊入れて 古きトランプバラバラと すたすたすた(雁水)

バタバタバタ、コケコツ 悼みけり 男みなもしやくくと くりて見ぬあの頃の コウクウ寝て居れず 近ごろ鷄を飼 (おさむ)

小兒科ひまがいり(八歩) アダダダダ、アバババ そろはん バチパチパチはい兵隊の 算盤へ千圓ぐらいパチと 夕立にボン(船も畵の でを切飾り チョン(と左ぎつちよ 語學校前で排英ワッと云 しやらしやらと緩よむ音 (治男 (豆 秋 (風來子) 宗男

すたすたすたの擬聲語を巧み 無技巧の技巧の寫生句であり 少しも耳觸りにならない、實 位にいたして置きます。 に大膽な表現の句であります ・七・六型の句でありますが 使ひこなした擬聲語の句で まだまだありますが、これ 「すたすたすた」の句は六

作者は思はず眼を奪はれ

構成された句であります。近ます。殆んど擬聲語によつて 思ひます。 りますが、この近ごろは凡そ が鷄の鳴き聲の擬聲語であり 妙味もここまで來れば神技と させて居ります。擬聲語法の ところに男の持つ間拔けさ加 のやうに空々しい悼鮮が澱 方が描出されて居ります。 と感じさせられるのでありま パラパラとくりて見ぬの中十 感傷を盛つた、七・十・五型 すたすた」は新聞配達が去つ擬整語であり、下六の「すた ただ口先でもしやしくと悼む なく口の外に出て來ないので けさも感じられます。 區別されてゐるのも面白いと じ言葉で、 て行く擬聲語であります。 バタバタ ふことが出來ます。 も出てゐて、實に單的な表 字餘りの句でありますが、 たは新聞配達がやつて來た 「ベタバタバタ」の句はバ 「古きトランプ」は作者の 男みな」の 顧的なものをしみん それがハッキリと コケコツコウクウ 複雑な人生を躍動 朝の早さも街の解 六の「すたすた の動作 中の廣がりで

この句などは所謂作らうとし この て作つた川柳でなく、心に感 が出來るのであります。そこ すの バタと羽ばたきをされ、 つちよで樂々と切つてゐるの ら生れたのであります。 がらもこの即興詩から何んの さまが、腹て居れずと云ひな さく感じてゐると云ふよりも 鷄の羽ばたきや鳴き聲をうる 境に驅られてゐるのでありま コツコウクウと鳴かれては、 耳元で、やかましくバタバタ つてゐたいのでありますが、 作者はもう少し眠りをむさほ ても無理ではありますまい。 れたがつてゐるのだと想像しに、鷄が早く鳥屋から解放さ コケコツゴウクウから察する を詠つた何なのであります。 ます。そして作者自身の心境 飼つた頃の近ごろなのであり 郊外生活をしてゐるサラリ にこの句のよさがあります。 寧ろ興味と愛着を感じてゐる 迚もジツと慶てゐられない心 マンが、なぐさみ半分に鷄を ーチョン(と」の句は輕 何の のは右手でさへもチョン 生句であります。鮓とい なのであります。 ままを率直に正直に詠ん かしこの場合、 バタバタバタ 作者は コケ

> そう澤山はないやうでありま が例に擧けられて居りますが

算盤へ」の

何も、「パ

音し易い音を模したものであ

キリギリス、ホトトギスなど

者にとつては、決して〈催位とあります、その千圓が作 らもパチといふ、そろばん玉 パチパチ」の何も、どちらも 僅かに一つ玉をはじくだけで す。しかし、その千圓位の金 ふ句があります。前句に千圓かなか儲からず」(冷刀)と云 何であります。「一萬圓位な をはじく音の擬聲語で出來た 算盤を詠んだ句であり、どち まことにあつけないのであ かな金ではないのでありま 算盤で入れると、パチと

ありませう。この場合、 に切つてるやうに感じたので のチョンくもよく利いて 何んだか 6 6 嘘

居ります。

の寫生句です。一幅

何

たの

であります。

がするからであります。事實 うに機嫌をとりながら診察し このしやらしやらも作者の創 チパチと音をたててゆび りますが、後句の方はパチパ をはじくには違ひないのであ 科醫が患者に泣き出されぬや なものではないと思ひます。 作的擬聲語であつて、一般的 じを主とした句であります。 擬聲語の句ではありますが感 いことと思ひます。 そろばんとは縁の遠い人が多 は何んだか縁が遠いやうな氣 であります。兵隊とそろばん てゐる情景のスケッチであり くのそろばんを思はされるの 「しやらしやら」とは同じく 「アダダダダ」の句は小兒 はじいてゐる兵隊の汗 本

してポンく船といる擬聲 た擬聲語ポンくが船と合成 ます。この句には船を形容し いふ美しさを寫し出してあり

類似の名詞を生じてゐる

のが

面

白いと思ひます。語

原上から見て名詞の擬聲語と

して大百科字典にはツヅミ

(鼓)、ガラガラ(玩具)、

へ眞一文字に! 大阪から神戸へ

たずに乗れ

たとへで、語學校がその槍玉をが憎けりや袈裟まで憎いの校に罪がある譯ではないが坊 來た時ワツと喊聲をあけたと 度の性能を持つものであり 英は排英の人々の省略であり 云ふのであります。 深酷さにしろ、より以上の强 ことが出來、滑稽さにしろ、 來ない多くの內容を描き出 葉で到底云ひ表はすことの出 と云う喊聲は大勢の聲を表は ます。從つてこの場合のワツ した擬聲語なのであります。 にあがつたのであります。 一て殆 要するに擬聲語はこれを最 適切に用ひたならば他の言 であります。 んど無意味に近い擬 排 す

森 梅

本

子

思はれるとの意かもしれぬ)。 など率加した人の、名を書き留める ので、前解の後段が正しいと思ふ。 は無いなどと、聲を荒らける人があ とでも云ふと、僕の懐に入れる金で 込みがあり、一日考へさせて下さい 持ちで運ばねばならぬ。 帳面なのだから、双方とも感謝の心 説である。奉加帳は神社寺院へ財物 省二=私も貰ふやうに感ずる方の 塵山=周旋者が感謝の意を覺ゆる 一處が近時度々寄附の申 此句のある

家一杯になる。家の廻りを蛙が鳴き

蚊屋の廻りと曲つて云

東魚=蓬生の宿で、蚊屋をつれば

(177)

蚊屋を蛙の廻る蓬生

五

編

我費ふやうに覺る奉加帳

時々蚊帳の裾に蛙が上つて居る。

が蚊屋を鳴き廻るのでは無い。 宿ならば珍らしからぬ事である。 で、蛙は上つてくるもので、蓬生の

省二=佗生活を思ふ。拙家なども

る

遺憾に思ふ。

つたもの。 めぐるのを、

塵山=梅雨期などには坐敷の上ま

のでなく、自分の事のやうに有難く れる。(或は「覺る」は文句を覺る を持ち歩く人の、人の良い趣が思は 文句など覺えると云ふので、 のに、自分が貰ふやうに、奉加帳の 東魚=自分の懐に入るのではない 奉加帳

(179) 湯殿山譯は咄さず怖がらせ

き御山と謂つべし。語られぬ湯殿に ぬらす袂かなー 羽前三山といふ。 信仰傳説がある。月山羽黑山と共に 人貴び且恐る。繁榮長にしてめでた 『修驗行法を勵まし靈山靈地の驗効 省二=湯殿山へは修驗者が登り、 「奥の細道」にも 湯殿山錢ふむ道の

> と、山の嶮しさの為に、尚々怖れを 奇異な傳説などは一層怖い。 東魚=只あらたかなと云ふ心持ち

涙かな

(曾良)』。譯も咄さぬから

怪なる多くの傳説があり、信者等は それを恐れてゐたやうである。 塵山=昔は羽前の三山に於て、奇

が載る。「いまから干三百五十年前 事とは想像もつかない難行苦行で深 ごとく山伏姿の法衣をまとひ金剛杖 澤寺で行はれる、この修行はいはど 東田川郡手向村の羽黑山修驗本坊荒 ゐる羽黑山の峰中修行は、 を残し今日まで連綿として開かれて 開祖蜂子皇子が入山されて以來傳統 夜締め切つた一室で大きな火鉢に濛 して行はれるが、凡そ一般の錬成行 切の合圖は神秘な法螺貝を吹き鳴ら 成講習會で入峰者(参加者)はこと 神佛混淆時代の遺物である山伏の練 和十七年)八月二十三日から十日間 にわらぢ、 省ニ=丁度新聞記事に羽黒山の事 脚絆姿で受講し、また一 今年

様だ」鍛錬としては最も妙だと思 かまうとする研究者の参加が多い模 下かうした太古の姿に日本精神をつ

(180) 赤すいき棒ほどにこそ成にけり

ほど云々の俚諺に、響かしてゐるの しいのであるが、前句が欲しい。 東魚=前句關係で、針程の事を捧 省二=芋莖が棒ほどに成り、珍ら

つたものである。 か子もなりにけり」といふ句を、 塵山=平忠盛の「這程にいもがぬ

(181) 波風立 ず今に貧乏

應に立つ男振り」(武・三)参照。 に貧乏をしてゐる。 な、ばつとした事も爲し得ず、今だ 東魚=何等世間の人を動かすやう ――一一波風の相

(182) 入聟の呵られはしめ年忘

省二=貧乏を樂しむと云はんかー

塵山=三年不蜚不鳴。

イヤ未だそこ迄には到らざるか。

ツと我慢をするナンバンいぶしの行 々たる藥味(ナンバン)を焚いてジ

斷食の行、道なき山野に分け入つた

熱汗敢闘の天狗相撲をとるなど

と云ふ身の上から、兎角に遠慮勝ち 東魚=聟に成つて日も浅く、又聟

けられる、なほ例年中央から知名士 珍奇な行事がつぎからつぎとくり展

子の千三百五十年祭に當り大東亞戰 の入峰者も多いが今年は開山蜂子皇

られるのだらう。 なのを、年忘だ遠慮なくやれと、呵

ら譴責を食ふ。 省二=お説通り。 塵山=少し羽目をはづして、 家庭内の お 舅か 小

(183 吉祥寺泉岳寺より面白き

むまい 岳寺事件を面白いなど申しては相痞 省二=吉祥寺には八百屋お七巷説 大衆向で面白からう。 ー私は吉祥寺へは時々行つ

も聞かれぬ。 も面白かつたが、今日に於てはそれ 塵山=覗機關の言ひ立て 東魚=巷説情話は俗耳に面白い。 (説明)

(184) 我負のほくろに指の行安き

黑子と云つて少し嫌はれる。 物に不自由せぬとか。眼の下のは泣 子は幸運出世するとか、首筋のは着 はならぬが、常に指がゆく。 る程の大黑子が口邊にある。 一生食ふに困まらぬ印だと云ふから 省二=平明な句。私には目印にな 額、 眉間、 眼の上の黑 これは 邪魔に

句 く、ほくろに手がゆくので穿ち味の 東魚=つひうかと氣にするともな

> になる故指で探つて見る。 塵山=小さな腫物が出來ても、

(185) 裸で膳を下げる靈棚

る。

塵山=浮世を捨撥といふ風趣もあ

出來た。暑いので一寸おゆるしを願 つての事であらう。氣分の出て居る ない仕業なのである。だから此句が 田園生活でがなあらう。 主人は裸である處一幅の俳諧。 暑さの去らぬのと、無造作な生活で 省二=裸で膳を下けるのは、 塵山=男はてくら女は二布しての 東魚=靈棚へ供へた膳を下ける。 勿體

金のない方へなみだを封じ込

(186)

ある。 真實の思ひ涙を流す、思ひを書き送 百を封じ込むのだが---間夫へは、 東魚=金のない方は色男、間夫で 金のある方へは、無心の嘘八

成る。 省ニ=女の心情、面白し。 塵山=涙も巧妙に利用すると金に

(187 春雨や古い妾のしのび駒

ひ。 妾。春雨、古妾、しのび駒と道具揃

東魚=春雨に若い美女より古い妾

省二=苦界生活であつたが、過ぎ 塵山=兵共の夢の跡の翻案である

省二=勿論鶯鳴かせた事のある

(188) 蚊遣り火を給仕は盆で消して行

うにする丈けで、蚊を追出し得たか ら消すのではなからう。 消して煙らせるので、炎の上らぬや え上つたりするが、もう多少追出し た頃なので、給仕は盆で消す。 東魚=燃え上る蚊遣りを盆で煽ぎ 省二=蚊遣火をたく。 暫くして燃

賣る娘の孝行と自分は解譯する。

塵山=金を買ぐ息子よりも、

ぎであらう。 塵山=盆で消すとは、少し巧み渦

(189)朝白の戸は母のからくり

いてある。 母が朝歸りの息子の爲に、 東魚=朝顔の咲く庭の垣の木戸は 開けて置

竹垣より高し。 ぬ、父親でもなからう。父の恩も亦 省二=「母のからくり」位を知ら 塵山=母の恩は竹垣よりも高し。

(190 排灯に年明共のゆめの跡

ものだとの意か。 の年が明ければ昔の夢の跡の如き 東魚=遊女の寄進した排灯も、

年増の妾を配した處が、却て趣があ ると云ふ、作者のねらひであらう。 000 去つてしまへば夢だ。 前二解の通

(191 大晦に眞の孝行

が買いだのであらう。 省二=大晦日に金の工面をするの 東魚=せつばつまつた金を、

士 (質) 武玉川研究正誤表 〇二三〇殿) 仇にに 震 仇に



MINERIORANIE

船倉は 住職の 臺石を 薄端も 愛用 色よりも 炭で 冬山の 帆柱に 臺灣 雕三 佛具まで出して 壇家に範を垂 襲に告ぐシンガポ 0)

移民團 宗教も 輸送船 スコー 國境へゆく 妻へ一 羽マ ・ルが足られ織つけたま 移 哲學 鷄も ストに止 〇港 一と筋 直 飼ひ è 地 を 線 りけり 獄 愿 0 豚 0 6 浴びる 兵 路 1 6 海靜 餇 走 强 霞 to 15 3 路 大 顾

郎

は

れて來し猫の子のまぶし貌

同

先輩に

聞けば辛 抱せよと云

射角よし合圖待つ身は雪に臥

この

やこの

紙中毒と 申さなむ

大

阪

義

雄

鄕

を

遮ぎる窓が 風ある朝を

結

濁水のあたりもやがて春にする

君の逢狀とこそ刷毛をとる

五.

三の比率を値でくつが

薬石解散を命ぜらる

久

選

ハンマーを愛し五年の日は流れ

松

月

同

えて貰うて雛の

莞爾

同

英 結

0)

列

下町へ曲り

虚心再起を期して

鳥取縣 同 同 同 同 同 同 同同 同 同同同 同 同 同 同 志 張もなく 聖恩に泣ける遺骨の置きどころ まだ猫に盗いる物がありました タイピスト出勤をした音を立て 類まれた 子と親と 亡父。貸吳ゃそうな家ありません トンネルを拔りと雪の降る故郷 戦線のニ 陰膳の湯氣へしばらく子も座り 環して北斗の見る部屋を借り 一轉車へとよりしいあわてやう 一國あるのみベルトの音に生き

I

指の太さも

誇りなり

東

京

青衿子

轉業と 定めてモー度 店に立 小便をして來て今日の幕を閉

育兄本たより過ぎたで痩せ細

西

富

佳

思ひ思ひの

の丘

四十六七八も

き

同

西

富

泡

標

è

新た法人

組

織

なる

大

阪

詩

朗

子

同

どうであろうと 學友だ

U

朝

鮮

東

、狂子

同

荷物が重い

途中下

車

同

繭

月

工場街

撃ちてし止ま

む

煙吐

方 き 0

大

阪

伊

郎

買

か

朝

鮮

林業子

同

6

酣

國

入

港

涙

な

h

環

レー半島

1

12

は墜っました

せよと御料

0

木曾路は斧の

音で暮れ 木を賜ひ

干

御

奉

公

凸凹支那の

歷

史

ょ

したと香奠

返しせ

1

大

阪

同 進 ユース尺八吹いであた

ながら遅刻

ば

かりする

岡

山

捧げ銃吹雪はいまだ止まぬなり おばあさんもう米英の旗も知 棺桶になるのは板のふしあは 着飾つて 娘新譜を 買ひに出る 納骨の 整備令のれんを捨てて起ち上り 1 ソクがまともに春の風を吸る 兄の死に寄せて(二句 朝はこまかい雨が降り 6 せ 西ノ宮

和歌山 同 宏 同

同 方

落ちぬ日へ夜襲部隊は腕を撫 のあひから鹿がの

萬

②筆を手早く入れているボ 夜せめてインキを入れてかる 從兄弟の入隊を送る 大阪府

統計を見て 寒くなり 入り スト 尼 临 應 同 治 丸

同

詩人好き O 西 潚 宫 洲 寒 同 錦 同 草 Ħ

貨ボー 櫻 慰問品まだ入れたらぬ母 お目見得。女中。化粧氣にかくり 心療橋で會へば看護婦笑を逃け 散 る 下で餘生は 櫻吹雪の 下で 店を出 ぞきに來 であ 摇 n 6 大 阪 П 阪 美 寒 秋 同 回

人沙女

浪

光 城 男 昨日ま 轉勤になりそうもな種子を買ひ 星ふえて 複をとる手で献金をしてもどり 至急親展 ヨイコドモ 君思ふ П 銃後もけうは ころろは明日を考へず 今征く人と 思はれず 船も荷物も 母の手紙は 寫眞嫌ひの を知る娘と思は 石鹼いらぬ 敵のもの 寫眞くる 緣 遊び 談

大

阪

惠

心美順

かと琴 東 大

降りた

馬

专

赤

纏

理解は鐘に

0

しをつけ

6

女

尊 45 數

E

入

6

丸

錋

浪 同

解めますと云でお嫁に

Z

もう見納めの

火鉢に晴れの

日が迫 色を活け

6

兵 庫縣 阪 京 花 惠 同 凡 美順 子

16

徵用令 定期券 對陣の 許 國 詩と書道そして自足の 文樂を 平凡に 女流作家 黑髪をそつと氣にする指でした 主婦の 捷つ國の 賞められた手相淋しく嫁き遅れ 好きな人ノーネクタイでする 御民吾勝拔く國のビヤウ打たむ やめたとて残るものかと吸いっぱ 御無沙汰をきまれて無心言ふ スタジオの様に工場が立ち並び 氣が弱く ひまもろて歸る車窓に薦が舞 群職める氣か看護婦近頃s**と來 大 勝つ國の 壁うすく隣も風邪をひいたら 可愛らしい 産幣の 可強の 一役が好きで将棋がはやり出 しぶり逢うたが喫茶休んで居 別に 枚 0) 出 0) 來た人も待つ 笑へば一度 昨日とけふが 友 まんまで星が 强さ障子を 越してきく 國策たんと 聞かせられ 寫眞 女の 我闘せずと もう御化粧の秘訣なし す手たのもし 賞 幸は寒さを 豆債券を二枚 吳れ 火鉢を置む 向 夜業手當も 慰問恩師の二つ 興 ふ笊碁に へ母の 世 勝ち 當入れるだけ 往けと言ふ 流れた 目を通 拔く狀袋 無い暮し 婦 溟 畠も打ち 覗かせる 忘れさせ 輪に外れ 米似たり 新 人帽 軍需 へ掛 ぐみ 紙 屋 U 星 L 大阪 名古屋 大 京 朝 大 律 繭 松 大阪府 大 大 京 大 臺 繭 大 松南改め研 阪 都 鮮 阪 洲 江 阪 阪 都 中 百 阪 阪 ひろし 祇 青 しけを 団 同 書 初 同 春 同 照 春 同 同 同 同 風同 人女子 H 太 童 慶 紅 盆栽で 公休日 曲り角 撃滅の 帽子かけ 長髪に 節 時計見る 8 長袖に 英語 平社 安 大陸で 戦線は 花さそう 雑踏を見下すコーヒひきよせて ひたすらにお召待つ身に春の風 嚙みどて見ればシキセ 辨當箱と云ふ包みなり電車の 病める子へ模型飛行機低ふつ 見てる。上硝子の前でやつす娘 刈 為替を組んで發つてく旅役者 產 科の 0) を

野外教練機關銃手

知らす隣の 雨を職場

借

電

話 る

大 京 大

生

丙種なる

身は荒驚に

悠然と

士の車窓へ

箸を割 乗つた

0

安 大

東

京 東 阪

夏は押し冬は押されるヒ

無き

山分け

0 ツトラ

長野縣

ナッパ服着れば陣頭指

揮に見

元

大

阪 阪

穗

亡き母を思ふ

牛に似たる姿で

街

を行

吉

大

宕

債券となじむ

國に生き

正 悅 明

未練の

いらぬ

時となり

出 大 布 大 神

御土産も貰つて代議 板場さん劇の役目も やがてなる母の訓へ 松もやめませうとて明けには T E L 征、身に輕るすぎる機關 今日征く友の 意氣が 育つ菜ツ葉を 出 まだ英米の 手附も舞臺 日本 して三十の 犬の分まで る日の羽 軍帽一ツ 燃えてる 0) 國 お 香がひ 土歸郷なり も聞でとき いたばさん 擧手の 馴れの顔 見積ら 客に見せ 少 継を捨て 神 召 し派手 まつ 0) そみ 禮 國 大牟田 長野熙 大 大 大 大 大 朝 大阪府 兵庫縣 大阪市 大 大 大 阪 阪 阪 阪 阪 阪 臥 幸 葛 泰 雅

鶴 慶 じ頭 枝丸 仙 お隣り 焼飯は 應召の 妻であることは言はないタ 旗立てくおいて一家は何處 言ひ過ぎるびしい夜にしてし 榮 お悔みも 無遠慮と云ふだあつてよく 花 E は と裸體が透る 0) が 俺にまかせろ つ船と知られにベンキ 息子の年を 何する人か 華燭の典と 寫眞で飾る 椅子へ安産 のべて特配 南 歸つて蒲圏 + 字 0) 出來上 歸 通 星 とわ 切符く 終 お 1 應 夜 ピス 知 電 E 還 0) 接 くる まひ 食品 100 す 車 月 F 兵 間 れ 9 6 れ 横須賀 小 大 大 中 大 大 大 大 大 津 大 大 津 阪 倉 阪 支 阪 阪 阪 阪 阪 阪 阪 阪 Ш

星常花

員

七圓の酒

0)

めも 座禪

せ 組

3

髯でどかつと 妻と言ふ名

腦 大

强く生き

尼 大 岡 大阪府

灯 0

阪

山

燦

太郎

鐵 美 お

路次

0)

壽同 Si

十五分間で 1

都

しこの御楯の

孫が出來

教師猫なで

聲を出し

の美しさ

安 ひ 眞

美 雄み

子 三角旗 助 重 食堂車 何時め 枕邊のみかん淋しく病んでゐる 神に 車 かりし母の當時をし 廣 寶 牛ときたなく しには、氣か鮮女ガラ拾 を 6 東京行車中 國府米英へ宣戰布告 なる決心で 取つて米英へ 期待以上の 鞘に 語る疊の ありては 友 富士 撃ち 街をゆく わ は TR れ 床 征き よう 向 見せ 見る 3 島 大 大 安 大 尼 昔 大 石 阪 根 阪 阪 東 阪 齮 屋 見 6 博 笑 弘 菜女 香み望 月 石 樓

表札屋蔣介石は書いて

馴れぬ人であらうと思ふ。で 得ないと思ふ。一本松が過ぎ 自分の村端れである、と氣が 去るまで離愁の思ひに窓外を めてゐるが、恐らくこれが 知りになつてゐた奇術師が澄

だなからうか。かりにこの句はなからうか。かりにこの句はなからうか。かりにこの句はなからずるので てゐるのではありませんか。 胸に懷き、悲壯な決意を以て れます。非常に淋しいものを から永久に去らぬものと思は この「一本松」はこの人の心 香林 =何處へ旅立ちするのか けてゐるやうには思へない。 も、それによつてこの句を傷 を離れる人の心持がよく出

離愁の瞳一本松が走り去 でせう

さが親はれる。

の人であ

路郎

.

.

笑、香林

.

幽王

が、 ないかと思ふのです。 ひます。い人句ではあります 凝つた句を詠まれる方だと思 も判るやうに、非常に技巧に き影を持ち」と云ふ句を見て は、次の「陶器店冬の冷めた ると思ふ。 =この秋暮さんといふ方 聊か 技巧に落ちていやし

旅立ちする時の淋しさは人の

住み馴れた土地を離れて

常であるが、

特に家庭的に惠

紫香=同じ技巧でも、 さは旅をした時の一つの氣持 さういつた自然に觸れる淋し 思ひます。この句では「一本 た氣分に一度は觸れるものと つてい」と思ひます。 であらうと思ひます。 必ずしも「一本松」でなくて 松」が對象になつてゐますが ぬ者が旅立つた時には斯うし 人でも都會の人でも、 も入陽とか、或は波の音とか 本松の句の方が切實味があ 旅馴れ 農村の

やうな時の淋しさは一度にこ

端れの一本松にさしかくつた

す。この旅が再び歸つて來ら みあけて 來るもので ありま

ありません。たど一本の松に 層淋しいものがあつたに違ひ れない様な不安を持つた時一

よつてそうした心境を充二分

思ふ。「一本松が走り去る」

表現法には住み馴れた故

に瞬時の別れを惜しむ淋し

一笑=私はこの句から何等技

作者は既にどこかで顔見 =さうした可笑しさの外

可笑しみを感じたのである。

して食べられると云ふその錯

から誰でも毎日食べてゐる

一笑=旅立ちを詠んだものと に纒め得てゐると思ひます。 の景色がどん~

と過ぎて村 なものがあります。又汽笛の れない人のそれには一層深刻

> 奇術師がおや人 べてゐる 一飯を食 (夕紫男

を拂つてまづいものを食べての出來る彼が、無暗に高い金 觀客の目の前で一皿 らといつて何等不思議ではな 出しないのであらうか。 園の檻の中の狸がある、 ゐる。これに似たものに動物 いが、併し一度舞臺に立てば 何故園丁を化かして檻から脱 一杯のコーヒ、叉は鷄卵、 笑=奇術師が飯 何んでも容易に出すこと を食べたか の洋食、 彼は 菓

からうかと思ひます。 ものであると思ひます。 様を親しみを以て見ておつ べればい」ものを一と、そ 奇術師なら自分の思ふものを がする。 「それは私も飯位ひ時不思議なものを見た様な氣 手當り次第に奇術で出して食 「奇術師でも飯を食ふのか?」 も知れないが、それを傍で見 は食べますよ」と彼は云ふか 堂に入つて居るのを見つける 或は落語家の彼がたまく食 なくとも相當知られた漫談家 ものである。かりに奇術師で 一笑=人氣商賣は甚だつら てゐると確に不思議なものの た顔をして飯を食べてゐる =私はさう思ひません。 V

である。先程解説されたやうから來る面白さをつかんだ句 頗る現實的であり、その對照 り、飯を食べると云ふことは 奇術と云ふものは超現實であ 非常に面白い句である。大抵 て奇もない句の様であるが、 路郎=表現は極く平易である やうに感じる。 なくても色んなものを取り出 日常に食べてゐるものを食べ に、奇術師なら飯の様な極く し、調子もすらしくとしてる

紫香 = つた人の名前を陳列させてあ とか忠臣とか成功者、さうい すか品物の見本に、 かしこしとか申しますが、 面白さがあると思ひます。 の氣持が出てゐると思ひま なくとも餘り悪い人の名前 いてゐないやうです。英雄 看板と云ひま 例

に悪いものを避けるといふ人 ります。兎に角、そうした所 を聞く場合に、ヒデヲのヒデ 栞 =商賣はその道によつて 介石をもつて來た所に非常に す。この句の場合、時局柄蔣 カシマといふ男がゐまして、 ものがあります。私の友人に 相手の感情を非常に左右する 英國の英ですかと聞くのとで は秀吉の秀ですかと聞くのと へば、ヒデヲと云ふ人の名前 すと答へてよく人を笑はして がうまいんだから表札屋位ひ と何かの仕事に失敗して、字 て非常に面白 拔け目のない商賣氣が出てる おりました。これは餘談とし かと聞かれた時に、この男は カシマのカは加ですか香です ならやれるだらうといふ内職 まあ無からうと思ふ。もとも 大變な變り者で、香奠の香で なところに表札屋といふも =表札屋で堂々たる店は 軒店の表札屋と雖も仲々 いと思ひます。

18

表札も出ているかも知れない てこの表札屋を一瞥すると見 のものである様に思ふ。そし 從つて大抵の表札屋は軒店式 感じたのである。見つけ方と う筈もない。それを作者は知 札が見本として書かれてるや 平時なら或は蔣介石あたりの はその代表的なものである。 本として英雄、 しては面白いと云へば面白い いつた空想的なものに興味を つてゐながら、その表札屋の 一つ一つを點檢して、 、今の戰時下に蔣介石の表 蔣介石はないな。 豪傑等では加藤清正など の表札が一並べられてる ---さう やつば 夕刊を讀みながら飯をせいて が出來てゐないのを知つて、 刊を見ながら飯を食べてゐる 觸れたものであります。 費せぬといふ點もあり機微に 讀んでゐるのか飯を食べてゐ

夕刊を見い見い飯をせき

りにこれが子供でもあれば赤

の上を拭かされるとか屹度

彼を想像して見たのです。か 仕度をして居る妻の傍に居る 歸つて新聞を見ながら夕飯の たのも、温順しく夕飯の時に 私が新婚の家庭であると云つ

た中流家庭の様子を詠んだ可 幽王=いさ」か倦怠期に入つ 一笑=私は新婚早々の家庭で ある句だと思ひま 或る一つの用事を言ひつけら 見ると新家庭でもない様であ れるであらう。先の二句から ン坊を抱かされるとか、又は

ひます。都會生活のあわたゞ 家庭だとも斷定出來ないと思 怠期とも思はれないし新婚の 香林 =私は自分のことを云は ころに和やかな家庭の雰圍氣 を見ながら飯をせいてゐると あると思ふ。倦怠期なれば夕 すぶつたく思ひます。別に倦 刊を見るどころでない。夕刊 た様な氣が致しまして、く す可きを「せき給ひ」と云ふ れる」とかの言葉で言ひ表は ゐる樣に思ひます。普通なら やかにせきつ」せかれつして せかされてゐる方も、甚だ和 題になるやうに思ふ。 夕刊の句より初めの「すきな ひと……云々」の句の方が間 るが、どちらかと云へばこの せかすなり」とか「せかさ ふ言葉で急かしてゐる方も =下語の「せき給ひ」と

言葉で其の雰圍氣を出してを 君であることが想像される。 度をしてゐる方は確に若い妻 ろから見ると、その夕飯の仕 た様に敬稱を用ひてゐるとこ =この何はヤマは ではないかと思ひます。 」である。今栗君が言つ 「せき

でゐる方は少しの時間をも空

るのか傍から見てるればまぬ

たものと思はれるが、融ん

あるのだと思ひます。

新聞を しさが斯うした習慣をつけて

後繼のない葬式は戯曲め

=香林さんのお説では夕

て行くのかなあーと勝手な事 的近親でない關係から暢氣に 者はこの葬式に列しても比較 を働かして作つた句ですが作 を思つてゐるのぢやないでせ =この あの遺産は一體どうなつ 句は非常に想像力

ゐると云ふのだと思ひます。

は勤先から歸つて來てまだ飯 のですね。私が考へましたの

> 主が亡くなつた其の日から戲 一笑=後織のない葬式。この うだゾ」と云ふ處ですね。 テこの後は戯曲にでもなりさ き葬式であるにも拘らず「へ 近親の者には悲しむべ

> > 婆さんでした。或る日ぼつか

く金さへ貰へば歸つて來るお

兎に角、

金額には全く頓着な

るるので、幾ら集金したのか

行くのであるが、少しボケて

になる。 てゐるが、確かに一つの戲曲 とほのかに句はせるやうにし でも口を出す。「戯曲めき」 交際もなかつたやうな親戚ま は申すまでもなく生前あまり 曲が始まる。イトコ、ハトコ

ことが窺ばれます。

=葬式費用萬端を差引い

ふ存分想像を描かす力のある ました。下語に讀者をして思 んの目が、戯曲的に光つてる た。その中にも老獪なぢいさ で、遠縁の者が集つて來まし りとこのお婆さんが死んだの

も六道辻邊りに家賃を集金に ました。獨り者なので、いつ 香林 =私の知人で七百萬圓 資産を持つたお婆さんがあり

さういふ戯曲にしてみたい。

もあり又佛もうかべる。私は 軍へ献納する。そこに花も實 た殘りの所有財産は全部陸海

(9)

拍 手

明

ける世界的なピアニストの獨 ひと昔以前、 朝日 會館に於

ない許りに大けさに幾度も幾 り、さも知つてゐるぞといは リズムに合はせて、編をゆす が始まると曲のメロディー、 奏鳴曲の第一樂章、開會當初 終りベートーヴェンの有名な から吾々の前方の席で、演奏 演奏中の曲目は、バッハが 靴音をたて」足拍子をと

する、滿場疲たる堅張の 樂章の第一音が打鍵されんと 内に響き渡り、 ことに不快極る非常識ぶり。 伴者にあたりの人の迷惑をも 度もうなづき、 美しく力强い最後の和音は場 たかぶりをして耳語する、 かへりみづ、一再ならづ知つ とかくする中に第一樂章の 果は隣席の同 次に續く第二 *

どろの何とも形容の言葉も無 時の火事見舞のやうに眞赫に パチパチと鳴る、 い恰好をした、さき程から 應報天割覿面、これはまた金 聽者の、一齊に注いだ眼の焦 熱烈極まるものであつた) にも眞妙な思ひのこもつた、 も、こくぞと許りに、あまり ムく拍手の音、へそれにして い素頓狂な、たつた一人がた すつかり面喰らはされた來 黒くなつた、しどろも 氣の狂つたやうに 突拍子もな

音樂家·大阪樂明會主宰

姿があつた。

折もあらうに、

何を感違ひ

19

誰れ分け入りて菫つ

龙 艸

は捨て置かなかつた。 山地來で何やらゆかしすみれ 鼻紙のあひだに萎むすみれ哉 ぐらもち あけぼのやすみれかたむくも

からう。 しく咲いてゐればとて、すみ らば、如何に小さく、つ」ま も、深く自然を愛した詩人な あらう。そして赤人ならずと 此の一首あるが何の不自然で 然に沒入し得た詩人にして、 れの花に心ひかれぬものはな

く優れた歌を詠んでゐる。 れ今盛なり我が懸ふらくは 茅花ぬく後茅が原のつぼすみ みれこの春の雨に盛なりけ 山吹の咲きたる野邊のつぼす

王朝の歌人にも少くない その他長歌にも見える。 れっみてもゆかむ袖はぬる 春雨のふる野の道のつぼすみ るいかなる里に十みれつむ 浅茅原見るにつけてぞ思ひや

限りなく多い。俳人もすみれ まで、すみれの歌を敷へれば 平安朝から江戸時代に到る あとたへてあさぢしげるか既 凡光

目曜如たるすみれの句があ これらの中に俳人一茶の面 置にらつす筆の細さよ霊草 葉つめば小さき春の心かな 土橋から野を咲き越ゆる菫哉

浅茅生や薫じめりのらす草履 地車におつびしがれし輩かな 壁土に塗りこめらるゝ菫かな 洪水の泥に一花すみれかな

> き出さずに葯が内側へ開いて 込んでゐて、花粉は外へは吐 の根もとを五個の雄蕊が抱き あたりで急に細くなつた雌蕊 奇拔さで、頭のでつかい腰の 雄蕊雌蕊が又他では見られぬ なのだ。生殖の重要器管たる 水などに流れ出ぬ用意周到さ るからその中に溜つた蜜が雨

前

途

西(5公)

がある。 諧謔がお家藝の松永貞徳に にはかさで紫にさく 武៍

野の

産とい

と辨

農が

色

作品がある。 やさしい心でものした數々の イロンもゲーテもテーロルも 三百種にのほり、西洋にも詩 を誘つたすみればざつと右の に詠まれされて來たこと、バ 通りであるが、此の草種類が 兎も角本朝歌人俳人に詩情

> 驚かされる。 色氣たつぶりな構造にアッと 姿と見せかけながら、 か、花自身おとなしい乙女の 愛するが、一番科學の眼をも に見せた造化の神のいたづら つて観察して見ると、その花 人はかくの如く此の花を 飾 全くお

けられる。而も横を向いてる をなし、植物學者に距となづ 鼻のやうに長く出つ張つて袋 等大きくそのお尻が、天狗の つの花瓣の、下部なものは一 それぞれ大きさの違つた五 川柳雜誌自一號至二一五號 柳川

身體、 風俗、

Z

前 全 借 1七(16)

快 兲(50) 三(35) 元(23) 元(46)

000(213

懺 悔 (4 7

彈かれて飛びだし、基脚部に 上部にある爪のやうなものに 座談會 要(48) 10至(32)

ゐる。小蜂が來て蜜の盃へ頭 の天狗の鼻の中へさし込んで 又二本の脚を長く伸して、例 贅 前 身 澤 一先(22) ||0||(23) 一九(21) 三三(30)

と花粉をなすりつけられる。 らの器管を動かし、ばらばら かく巧妙に出來た花は、そ 人 頭 痛 物 一元(17 一公(19

をつき込まうとすると、それ

座

談

一0元(19

よいかといふと、すみれの結 れで定めし受胎結實の成績が 人人 殘 十八九 業 元(23) 二(33) 107(34)

の喜ぶあの愛らしい花はあま 實する花は別にあつて、

20

類

題

索

31 (9)

文

の空に櫻の花がばつと

も詩人の姿ではない。 方ばかりに向いてゐる。少く た小鳥でも追ふやうに、空の かれ戯れるが、その眼は逃げ 何の気もつかぬに土手のすみ 知

に緑の葉蔭につくましく、ほ こくに咲いてゐるとも云はず の意を托するすみれこそは、 西洋人でさへ、貞節、謙譲

夜ねにける 春の野に須美禮つみにとこし

みれ摘まんとて、野に出た して始めてあり得る境地、す 自然を愛した詩人山邊赤人に 春獲き頃にあり得べくもない ま」一夜度明したとは、まだ 萬葉歌人のうちでも、最も われぞ野をなつかしみひと

ム笑んでゐる。

唉く。人は唉いた唉いたと浮

る。數へて見れば、

戸の口はむしらすと置けすみ

されば萬葉の歌人達はそれ

すみれつむ野べの霞にやどと すみれ咲く遠里小野のあさ露 に

ぬるとも摘まむ旅のかた へばころもをうすみ月はも

曲解するなかれ、赤人如き自 を若き女にたとへたものだと 誇張だと思ふなかれ、すみれ

> (一)人情、 ことを示すのである。 號)第一六ページに前借の旬のある 6)とあるは第一七號(第二卷六月 下の日本數字は「川柳錐誌」の號數 ▼題の配列はすべてABC順、題の 表ページ数、例へば前借一七(1 で、算用數字は其の號にある題の發

いものとは人ばかりでないこ ものである。見かけによらな こつそりと自家受胎を遂げた と握りこぶしをばらりと三つ の花瓣も持たない閉花の中で るが、あれは春咲く花とは別 けてゐるし、も少し日がたつ りこぶしを一株から數本持上 な種子を包藏した、長みな撮 に開いて種子を撒き散してゐ みれ草には、けし粒より小さ 物に過ぎないのである。 れとも言ふべく、作は所詮飾 夏もたけて野に見つけるす の悪戯とも化自身のたはむ

とを御承知ありたい。

うなんて云ふ人もあるやうだ 來植物がその當時日本にあつ はない。第一けんけといふ外 そうひねくれて、考へる必要 みれでなからう、けんけだら の歌人のすみれとは、今のす めつそうもない、これは に掲げた赤人並びに萬隻

> 説が正しからう。墨拑はずつれが、すみれになつたといふ と昔から日本で使つてゐた筈 似てゐるところから、すみい 好が大工の持つてゐる墨排に鼻から來てゐる。即ちあの恰 である。 又すみれの名が、あの天狗の たかどうか疑問とするところ

名が庭を指した。昔、庭のすみ 信じたい。桐壺、梨壺などの 斷定はしかねるが、まづさう 庭すみれの意であるといふ。 調べて見ると、壺すみれは、 古歌の壺すみれである筈でも 今つほすみれと名づける一種はないらしい。もつとも、現 ない。いろくしとその調れを 入つた種類をさすが、これが のほとんど白く、紫のすぢの は葉の心臓形をなした、花色 のだと言つてゐるが、さうで か、この花の距をさして言ふ んである。あれは契沖だつた それから、 つほすみれと詠

> 質であらう。 れを壺すみれと呼んだのが事

> > ありませんか?

老夫婦が心療橋の人混みの中を、

!貴女は心も磨き忘れてゐるのでは

である。 書きさへすれば間違はないの 立派な和名のある限り假名で 言はせると違ふさうだから、 てゐるが、これも牧野博士に 植物書に紫花地丁の字を用ひ ちに陷るからである。大概な 漢字で書くと飛んでもない誤 は植物の名は大抵假名で書く 料理に使ふパセリーださうだ 事にしてゐるのは、うつかり から大變な違ひである。私共 牧野博士によると菫菜は西洋 が日本のすみれに當らない。 くが、皆支那で出來た名稱だ る。 堇菜と書き、 菫々菜と書 此

革
の字は

當を

得
ね

も
の

で

あ 今日、急には改まるまいが、 が、もう古くから使ひ習した

のて、 あるといはれる。 世界に三百種のすみれがあ その百五十種が日本に 私達が山野

主治效能

ロイマチス、神經痛、打撲痛 氣管支炎、扁桃腺炎、中耳炎 感冒、肺炎、肋膜炎

に留意して製造せるものにして用法も至極簡便、

て支差へありません

あらう。 樂を飽かしむることはないで はなくとも、一日の野邊の行 人のやうに一夜野に寝るまで 君も目をとめて御覽じろ、赤 から春に親しみつく、讀者諸 氣品のある可憐の花を、これ 春だ、此の小さいながらに、 れない。いよくすみれ咲く を歩いてゐると、十種や二十 種は見つけるに大して骨が折

雜 記

靴にも化粧してやつてもらひたい。 ものが多い。成程帽子や服け目に立 り、とにかく注意せぬが故に痛んだ のあり、形のすつかり襲つたものありにもみじめである。泥だらけのも ある。顔に毎日お化粧される程に、 つ。しかし靴けもつと目立つもので 局的女性として、 い。しかしその靴を拜見するとあま オブラッシをかけるなり磨くなり ればいる。靴を磨き忘れた娘さん 帽子も、服も、 オーヴァも成程時 簡素であり美し

福田 妄夢 くそして樂しい風景にした老夫婦。 りやすい心療橋の通りをこれ程美し は幾更不愉快だ。とかく不健全にな 喫茶店か何處かの女をつれてゐるの 本は强いと感じた。 こんな老夫婦を見てゐると、成程日 何にも陸じげな老夫婦を、人々はほ 手をつないで歩いて居た。おそらく 々と歩くのは気持が悪い。大學生が いく二人連れば少ない。若夫婦が惱 二人連れが通る。しかし之程氣持の くえむで見送つた。心療橋は澤山の どちらも七十餘りであらう。この如

一、本劑は長時間使用出來るやうに工夫してありますから持續時間は任意にし 今般エキホス姉妹品として發賣したる本劑は事らその整効並に持續時間の永續 安全なる粉末濕布鸛なり 芸を 100 E C-PE19

しい。 かに有志を募る事よりは、直接人々 て、大衆に呼びかけて欲しい。ひそ のは何故だらう。もつと衝へ進出し つただけで、その後何の行動もない や〇〇薫の有志等が、 只ビラー枚貼 交句である。しかしその○○正義會 と云ふビラを見受ける。甚だ結構な よーそして國粹〇〇黨に参加せよ 〇正義會へ」とか、 街の電柱等によく、 一石人上目覺め 一來れ我が口

21

硘

引きしまつてよくなつたと好評編輯 は前號から減真を刊行したがむしろ あつた。某誌は經營難、某誌は廢刊 の苦心が酬ひられた譯、中には減べ ★前進又前進、善闘又善闘の本誌で ある次第である。

一層の御後援をお 甚なる御支持のたまものと感激して 棒し得られることは一つに諸賢の深 行を織け日本新文化島楊のために歴 との噂を聽く際、本誌が嚴として刊 某誌は営局から廢刊の慫慂を与けた ージしたとは感じられぬといふ聲も

仕事に從事してゐながら、この盛會たことを深謝したい。非常に多忙な 抱選氏等までが特に顔を見せてくれ つてゐた櫻川不水氏や大牟田の高田 鉛を見て、 運輸に敢闘しつくある人々のこの除 大會はなかー、盛會だつた。交通と しかつた。殊にとても會へまいと思 人たちに會へたことが何よりもられ ったと同時に自分としては久振りの つくしく日本の强さを思

中耳炎 商槽膿傷 扁桃腺炎 品製內之山

軍神十勇士の散華を偲んで、その象

福井哲氏の作品である。

徴である機樹のゆかしい姿を選んだ

あられるので、

今後引行いていろん

始んど世界の隅々まで足跡を印して 筆者、西川毒美氏(不朽洞會員)は★維文欄の祭頭を節つた「刀劍」の

た原稿がいただけると思ふ。氏け目

旅行記刊行計劃の下に執筆をい

そいであられる。

香林、幽王の諸氏と私とで月評の集

りを本社で開いた。月評「川柳一ト

筋」がその収穫である。

★山口で開かれた西日本鐡道人川柳

ほがら、ほがら、神代を今に國産れ 箒 大 一ぱいに 御 目 殿 0) 6 ラジオをかけて そ " 1 繪心が 波を描き 島 正直も 根の國でこそ 性れつき 鋸目立 五 。健

> 姉 决

Ш 久 留 美

安

猛牛の 樹の骨に 玄 第 玩具みな 明 卷 * 步 は は T 盐 長 棺へ入れたと 利子をまけぬの 風無く 1 けさは枯葉を 禮狀だけは 他 に 3 期 脚一ツ 佛も 輸 戰より 未だ長し 彌 入に親しめず 生 秘書でなし 見えません 召しあがれ 十日すぎ 歎かれし 一ト掴み 御面

腹立て」からの文字は生きて居り 兵庫縣 崎 柳 秀

芝居を持つて來阪、應援される豫定

區名に變更となった方々はお知らせ ★大阪市が二十二區制となった。新

が願ひたい。

良い體 玉 念 0) 惜しいビツコと 額 を 莨 0) 煙が

K 母 利 此 0) やうくなつく 野 音もなつかし歸還兵 ないのに 處 6 於 か 段 作り鷄も飼ひ 6 縣 氣が 變る 軍醫見る 嶋 女の子 撫で 隣組 詰り 田 黎

峯

町

後添 妹 福井縣 村 田 丈

木炭車 間違つて 點 國境まで 善 乾 國 窓硝子に 後 電 數 境 0) 池 を 策 まだ二時 響け 1= 吠えてきまりの さらつて行つた 肉 氷花いつまで 八 ぎ 0) だ H 寒夜の 間は 有明の 相 # 國 0 つた認印 かしります 火の 守り 6 亂れ咲く 月となり 橋 洋服 悪い夫 太い足 高々と 紋 克

海

前號この欄で發告した通り、急に山は迚も不可能だらうと思つてゐたが かつた自分としては戻りの山陰廻り てゐる。田立前に健康が思はしくな をもたらした幹事諸氏の勞を多とし では自魚が飯の印象を深めてくれた 謝してゐる。出雲では金瓶糖、松江 集散談の一夜を過ごし得たことを感江支部の幹部の人たちにも會ひ、小 うちのきらひがあったが出雲支部松 山陰の柳友にとつてはいさくか不意 陰廻りの行程をとつた。それがため

御鯨恕を請ふ。

★三月十七日の夜、栞、紫香、一等

切までに未着、次號には必ず掲載、
★一路集の選者が出張旅行其他で締

を探ぐる。はピアニストの角田明氏 ★永らく中絶されてゐた『ユーモア であるから御愛護をお願ひする。 しかし稿を絕つことはしないつもり誌面の都合で豫定通りに行かない。 で毎號執筆したいが、時間の都合と 號に發表、大いに期待されてゐるの ★拙稿「初等川柳講座」の顧稿を本

人の拍手」を執筆していただ

い。そのつもりで御後援が願ひたい出來る限り、愉快な記事を満載した はない。海軍の兵隊さんへ慰問誌とし海軍の記事で埋めるといふ意味で して捧げたいといい意味であるから ★五月二十七日は海軍記念日なので 多田市多樓氏が、海底トンネルの紙期待を乞ふ。この會には下陽支部の して開催することにした。これはい ★五月の句會も「海軍慰問句會」と 五月號を海軍慰問號としたい。しか 水)午後六時から開くこととした。 つもの會場御津八幡宮で五月五日

會員を募る

りたい人▼人間陶冶の詩として川柳 ▼戰時生活下の常識として川柳を知 松坂俱樂部 川柳講座

> を創作したい人
>
> 一從來作つてはある しないと思はれる人々は▼松坂屋 が、よい指導者がないので一向進步 部受付へ申込まれたい。 ケ月一間。入會希望者は七階の俱樂 曜日午後二時から新形式によつて開 講(作句・添削批評講義等)曾費一 樂部の麻生路郎川柳講座へ入會され たい。講座は月二回、第一、 (日本橋筋三)の七階にある松坂俱 川柳講座幹事 第三日

西日本鐡道人川柳大會の人々 於廣鐵是山口條雅強揚)



柳 日午後六時半波夢造居に於て開く▼ で開催▼川・維堺支部句會は二十七 川柳會は十二日午後七時▼大阪遞信 は二十四日午後四時▼尼崎住友産報 路郎川柳講座は十四日二十一日午後 御津八幡宮で開催▼松坂俱樂部職生 七日午後五時半大寶聯合町會學務所 曾句會は十日午後五時半花連亭・廿 病院川柳會は十六日午後四時▼岬生 ▼本 龍三月旬會は六日午後六時から 一十五日午後五時開講▼阪大川柳會 一時▼有恒俱樂部川柳講座は十一日

川・维花園支部創立句會が二十日夜

は企業合同の大日本内燃機製造株式 された▼浪玲之介氏(不朽洞會會員) 泊、翌八日は出雲市へ、出雲支部の線 會社の取締役に就任された▼脈生路 神足村馬場神足變電區の助役に榮襲 月氏等と合同小集會を開き、翌九日 之助氏等に迎えられ同氏等と松江市 主幹は三月六日夜の本社の句會で講 内地へよびかけてゐる。▼脈生路郎 即主幹は堺市役所・堺市銃後奉行會 俊闘阪された▼清水史路氏(不朽洞 鐡道人川柳大會へ出張され、同断一 で七日午後一時に開催される西日本 で山口市湯田町廣郷の山口修養道場 演を終へ、正本水客氏と同伴、夜行 色紙短冊展や開催する由で出品方を 堂で五月中旬米英縣被翼贊文化書書 化協會蘇雅分會後援の下に徐州公會 ▼徐州文化協會(中華)では中日文 へ、なにわ旅館に於て松江支部の詳 (不朽洞會會員)は京都府乙訓郡新 日も早く快徳を祈る▼阿萬萬的氏 絶對安静を命せられたとのこと、 員)は三月九日から病臥、醫師か

> 報國交學會の成立と共に經展的解消 こと▼都路紅多呂氏(廣島)が三月 をなし川柳部門を獨立結成するとの 適の書である▼朝鮮川柳協會は朝鮮 亜書局から刊行された陣中慰問に好 を東亞會館と改稱された由▼麻生路 岩崎柳路氏(不朽海會會員)は店名 機會に、別府へ案内されたとのこと 野田、下隅と次ぎに一く出張されて 蔵のくせがつき」の句を揮毫された 子「伸び行く堺」へ「聖職へ子は萬 郎主幹が熱血を避いで選句編纂され のたが母堂が

> 間島を訪ねられたのを ▼濱田久米雄氏(廣島)は宇部、小 から刊行された郷土將士への慰問册 一十一日忽然として大阪に姿を見せ に戦級川柳人の句集。陣中川柳一が興 一母と子と妻と來てゐる春の旅」



阿蘇、永俣、鹿兒島、揖宿、霧島、 ことである▼和田默然人氏(清水) 少、鳥取支部の鐵州、湖山氏等をは とのこと▼鳥取方面の地震は被害微 ▼元本社編輯部に勤務してゐた竹中 アート氏(本社編輯部)の諸氏離阪 青島、宮崎、別府を經て歸路三月二 關、博多、唐津、長崎、雲仙、熊本 氏(豪中)は三月下旬に來阪される 式會社東京出張所へ出張▼窓山武士 町二ノ一〇六、中部第一研別砥石株 夷一笑氏を驚かし、そのまま隔膜▼ 樂部麻生路郎川柳講經會員)、麻生 朽洞會會員)奧村正太郎氏(松坂俱 れ路郎主幹と歡談▼田中風葉氏(不 十二日來社、廿三日不朽洞へ來訪さ 二月二十七日清水を競ち、宮島、下 じめ川柳人には損害がなかったとの 新川博也氏(大阪)は社命により約 ヶ月の豫定で東京市麻布區新廣尾

津夫氏(尼崎)は光洋▼佐竹隆風氏 ▼大西松南氏(大阪)は研太▼土産美 (尼崎)は隆興▼倉棚湖氏(大阪)は

★社の回覽板

作に戰時下の餘裕を示し、寺内動物 氣島揚の登とし、同事務所階上で句 中川柳三百點の短冊をブラ下げ、士 物園で開催される。場内の櫻樹に陣 月十一日午後一時から市立天王寺動 ▼本社主催南方動物川柳會が來る四

からの快報があった。

君を儲けられた。慶祝。▼岩崎勇記 四日和歌山陸軍病院に於て逝去され 本社費助員)の令息林次郎氏が二十 眠された謎んで悼む▼長野晴濱氏(氏(山口縣)の失人が三月六日夜永 た哀悼の意を表する。 ▼福詰東雀氏は四月一日、長男繁樹

員)は尼崎市東町南濱一丁目五櫛部 八百八傑方へ 下町へ▼飯尾客與史氏(不朽洞會會 地へ▼田中宏氏は田孁市今市區三京 名古屋市千種區大久季町六丁目八番 ▼中西おさむ氏(不朽洞會會員)は

號 る。來會歡迎鉛筆持參。 幹の「陣中川柳に就て」の講演があ **園長の「南方動物漫談」麻生路邸主** ▼不朽洞會新會員發表

上掲の寫眞説明、前列向つて右より

水谷 零水氏(竹莊氏紹介)

吉田木阿彌氏(妄夢氏紹介) 图 谷關好坊氏(市多樓氏紹介)

樓·忠孝·斗風·淺一·愚蓮坊一一 竹器・九の字・道場婦人(後列市多 英中・窒水・茶目坊・樂蓮坊・游記 (中列)不水・不川・清孝・終始・貞 米三・俗菩薩・鯛好坊・抱逸・路郎 師·久米雄·葉留路·秋史·井蛙 一・三男・春巢・水客・喜樂・三岳

属器科 科科 長 醫學博士 井尻辰之助

皮泌

大阪市南區千年町(南警察署横 電話南60四四七五・二一八五番

アキラ氏が上等兵に昇級したと蒙疆

後 銃 戰 線

寫謄 阪

\$

阪 H

のちあ る句 £ 創

れ



♥開供月日又提新記入▼締切は▼開供月日及場所記入▼締切は

投稿清規 社 月

で飾りのない氏のお話は感路深きものがあつた 山文三の兵隊さんへの慰問誌に闘する講演が ない標語的な句に墮せぬやう特に驚告された。 語と川棚との本質的相違點を指摘され、 て本社三月例會が開かれた。席題披講に次いで 最後に「職線を想ふ」と題して戸倉曹天氏 て、大量に迎合すべきでないことを强闘された 父川棚人は文化の指導的立場にあるべきであつ 略郎主幹は「標語的な句を排す」と題して、標 一月六日(地久節)夕刻から御津八幡宮に於 溫情と慈愛の誑つたしかも眞面目で卒直 於御津八幡宮 くだら

出 席 者(順不同

興・一馬・喜弘・寒浪・登志緒・甲東・正也・ 木阿彌・妄夢・鐘馗・不二・潮花・吐空・掬夫 鮎美・曹天・外道・文雄・火泥・喜三久・東雀 久男・磯石・緑風・九一・孤舟・水客・拓郎・ 紫香・緑葉・茂・三葉・光洋・泉泡・松緑・隆 ・帆船・勢三・銃人・黎光・三司・香林

過

b 靜 水 兼題『船』 先 か b 0) 遺 へてくまた船も征く 草 骨 0) 原 題 船 0 0 女 E 萠 ボタン雪 えてみる 船を降り 息 泉吐 泡 空

過去をみな。忘れてしまふ。煙草の輪

紫 三

9

角

日

0

雪が

まだ残り

喜

弘

る

友の肩先

月にぬれ

知つてるのが一人

決ば 交 船 今舟を見れば キャビンに寢て按摩を取つた時もあり この舟も油の切れた座りやう 南 月 船腹は敵の 曳 あ 淨 子が書いた 船は何でも 陸奥といふ 造 喜・怒・哀・樂のせて港へ船は着き 萬 再 船 輸 獵 死 んざ 船にまかしかんてき何か煮え 大工太古のまくに火が赤し 知 船へ撃ちてし止まむ気が揃ひ 嚴 起 室 0) 城 送 船 洋 光 れ 隊 再起 の アカを落して ドラがなる 0) を覺えた頃に下ろされる 風に船ほつとする良い港 へ 勝て上勝つそと 槌は鳴り 船捨て身ばかりが波を切り も哨戒と云ふ役を持ち 0) ず 路なけれとも おろして船は腹を見せ 下 行き先がある輸送船 病院船は すべり 出し 堂々の輸送 重油が 浮いてゐる 神代もしのばるく 歸つてき で 輸送船 不 普 三裂 水不 帆 水 綠 勢 曹 正文 妄 火 泉 隆 水 === 松 九 藥 光 泥泡 興 客 司 客 船 天 也 雄 夢

酒少 水晶 神の子に過去なく明日の銃を置き 看護婦の一人敷寄な過去を持ち 尺八の 漢音へ 過去が よみがかり 出世して 一一封 業 去 の珠敷前身をかくさない へ過去 いまだ、未解決だが顔のシワ 兼題『過去』 過去 過去を淋しいものにする 淋しい過去にふれてくる が、笑へる日の歡喜 を清算した心算 水现外 紫 水 = 一失 文 紫 選 名 雄 客 舟 司馬 客 客

停年へ理想は過去にぼけてある 過去話 許され 過去の夢 一さいの 一人居て さんまいめと云はそで過去ははげちょうけ くずれ 落つ 牡丹に 過去の 悔覺ゆ その過去にふれずへいへい使はれる 湯上りの 談 がな過去婚 が うつかり 友の過去に觸れ 過去に觸れたくない小道 す夫の顔に涙 今は甲斐(しい 去僕の過去とが握手する 轉形へあまいあまい過去 た 領持で 過去の 話する 過去を 忘れて 船出 過去の傷手にソットふれ 笑の御 モンベ あり 臨 する 終 登志緒 喜 吐 香 紫 潮 鮲 同鲇光 仙潮

香 花 平 弘 空

弟が 弟の 弟が 召の に兄の の手 弟 弟は手垢にすべる笛を吹き 総 世 から して白痴の兄を大事がり 4 爲 が 0) 題『兄弟』 兄を 0 聞まれてゐる配ひ酒 なく ٤ 娘と兄弟は 兄 揃ふ墓参の道 一人は株で儲けてる くも 無 ふた母の説 良縁ふり 日 溫 ひ 曲り角」 絣 兄さんの殊動甲 は兄弟おとなしい 別な方へゆき 兄弟に 手をとられ 手を知つた赤襷 南で死ぬ氣なり 見送る作 然があきたらず 似てゐる肩の巾 0 着 お茶をのみ で來 かず 業服 が青 生 H 作 盡 一鐘 紫 翠泉 不 香 掬 水吐鮎水孤 鮎 紫 蒯 緣 選 香 美 花 舟

兄 應 兄 兄

弟 兄 兄 兄

出

こしで別かれる 荷を渡し 孤 ·藥 馗 香 光泡 二林 空 美客 舟 馬 夫 客

> ほうれん草まだあるらしい 曲 絕 曲 國 征 b 景 9 旗 0 角 角 子 息 奉仕 こくから 送 を入れてる 0) つて行った立語し で建った曲り角 要 が揃つた曲り角 知つた道になり 残る 曲り角 曲り角 曲り角

> > 製

久

香 光 =

司 平

梅田支部句會 (大阪)

美洋葉花

節

ほんとうの笑顔は佛に見付けたり スクリーンの捕虜は笑顔でバンを食べ 士ふと順番といふを忘れかけ 去は 香 電 電 電 電 電 電 電 ^ 5 を 0) 0 も武器だ靜かな街となり *3*6. 街ふるさとを思ふ情 何んにも云はず 眼鏡拭く 聞きわけのよい子と座り して工場は 心 部 夢 エスカレーター 妖氣めく 探 順 店 淵 屋 再出發の 番があ から聞える大戦果 れしく書ける慰問文 照 十萬圖 燈はよく光り 橋でけつまづき に一家の Š. りもの悲し 0) 夜 今日の意氣 活氣づき となり 雨が降り フサエ よう路 線 那 = 治 靜 吐 雲 吐 由 布 治 司 男 波 夢

節節節

節

節

節

節

節節節

鄉尼崎支部句會 (尼崎

薬見かされ ながら うれしい高島田 素見しの目にあまりたるはちをつけ 見 見 退 の手 は を 二月二十日 先 又 見 合 は懐 來た店へまび戻り 中であたたかし かと素見かされ 美 知 夫 鮎 Ŧ 同 報 美 石 樱

光

默 翠 袋 袋 袋

袋

0

Z

平

自轉車も

止めて戦果を聞

いて居る

梅 路

伊太古 嶺泉

尊

٤

L

我が

銃

剣の

征く處

武 武 武 武 人

チ袋 チ袋

押して 幹

見ては羽子をつき

中 が、姉 遭

胨 如 2 族

は

妻に聞いて入れ

一夢

チチ

2

足らな

事

13

指

を二本出し

晚 同

浦

ンプの光り 地下干尺の 我が職場

さわた

Z

節節高

無き

は で

四く口紅像窓なくと呼ばせる若い母

吞子ポーポ

0

を 遊

6 E

る子

手

哭

3 t

兵 安

逸

る日 か

0) 眠れ大戰果

戰

果

子等は手に手に

=

一山水 大

田 しげる 紅研

香

靈

6

に

行

田舎の娘 廣島支部句 掛けて 薬見てれくさし (廣島

子

煩

4

4 2

1= 0

貯

金

帖

不

年

曜

日 惱

子

供のまくになるプラン

月二十一日

月留决决决曉 H の守職 戦の 戰 本 所 0 丈けで門出の は立 一泰糸然 は を樂しむやうに彫をふみ 唯出 母 門 \$ ~ 假名文字がやつと書け 一派に 乳れ 出の朝の火を燃やし 遊劉 として 富士が晴れ ば 0 ぬ編 聲 守る 店構え ぬ。茅を揃え 於日本棋院廣島支部 あつけなし もよし 隊機 同 演算子

> 9 泣 戰

年

0)

3 0) 13.

L

ぶり

母 夢

甘えた壁になり

うめの さわだ

那 路 泉

郎主幹歡迎小集

聲も

して

女房 は、戦

勝となる 大空だ

路

地地

年乃

友

0

殘

した聲

お母さん

津支部句會 門出の 友の 手を 握る

會う毎に 無 車長車車長 長 介 を 長 禮 驱 生 座 座 生 添 生 かしさはあいつが孫の話する 生 3 3 ~ 6 ~ 0) 0 を訪 醪 目出度くけりのついた酒 嫁六 三月八日 飲んで征 徳か皺に 聞けばよく寝て早く起き 白髪のことを一云はれてる か ばたいて今日のニュース開 かに 萬歲 に成 へば + 笑ふ病み上り に手がといき 係 さ せられる つた 殊動甲 も艶を持ち れと部隊長 風の中 く完 緑之助 榮 研 雀菩薩 龍 笑 同 同 同同 同 報 兒 . 路 治 A 鬼 郞

だ E

蚤 節

一は脊中

E

廻るらし

伊太古

孪

くれだつた 手が 自慢

を T \$ 6

かず勇士の母なれば 物の話でかいこと

若菜女

笑

めて

泣きもならない 白木箱

とし

ての東ね髪

香晚不嶺 林浦二泉

人人

削

なく母親はかんをたて 喋る女房へ眩一つ

憲 花 勝 村

一月十四日 於香林居

否 林

報

林平浦 繭ぎしりをして 来 史 戰果發表 齒 鱽 幽 地 見 本も < 我が未闢還に かしこまり 3 戰 世 害 處 果 職友を 飛び越える た \$ ソロモンの 節 無 掘 3 笑顔を忘れか 殘 院 世 甲 船 榧 大 を撃ち 合

豐柳雨同

志

秀 蛙 舟

疑湯で着物を着る
に

父

か

頁

付

維川

出雲支部句

會

(出雲)

月三十日

研

路

點

を取つても

叱る気になれず

待たせて置いて 見をあやし

同同香乙晚

久節 神の記 すらをの凄とし今日の地久節 久節 モンベ際々しく 麥を踏む 素なる粧 今感 狀 へ今日も 節 Æ. 母 9 こましやくれたる 女の子 0) 0) 土筆が土手に芽を出した 母と + 0) 00 力 謝 數 專 纜 4 を 0 力 力 0 老 ひもよし地 東 空し 懸謝 感謝 E 身なり 境に入るを知る に手 育ち 太 で觀終る を合 1 腕 の油つぐ 力瘤 たる 角 久節 力 せ まさる されだ 綠之助 笑 まさる 同 慶 研 しげる 同 悅 研朴壽梅

勝殊人湯老首懸旋軍主地簡

0) 相謝 盤

業も 入 手 動 生 Ŀ 社 を友 口甲 員先 づ机から致

坊

路

雞川 祀 景 支部創立句 (大阪)

新 鹹

朗

鐵の山 がらくたも 電子を書いて書いて書いて書いて書いて書いて書いてまる。 スカレーターにも勝つための歩を運ぶアート 中ツ 電 0) * 坊やのおもちやも中にあり 步 チ 月 家寶も一緒に の夢 いて H 0 電 は 開閉一つが 先 0 ベルトも第らん 昇 0 から消してゆき 街 日 る 宗 見下ろして 於木阿彌居 回 節 衛 御奉公 門 收 電 日 車 町 安夢報 アート 登志緒 福 登志緒 見 本

まざる されだ 大軍傷心忠忠殿 忠 見 品 織 = えす る 戰 告 兵 齋 告 告 奮 出 果 橋 は は ti か 0) 各所 白衣 戻る白 少し一酸はせて置いてから け一般らせといて苦言する 白衣は黙つて聞いたどけ ガダルカナルの 事に関れ 阿呆らしなつて 飯にする いた話たばこの煙を追ふ h 鐵 * せめて火鉢上先に征け のの 2 衣は 春はまだ寒し 友が聲をかけ 栅 色に 、美やまれ 雨を行く 塗り 小松月 小松月 小松月 一妄 妄 甚 美 妄 夢 雀 志 笑 夢 笑 太

雕

公

市 柳

白婦團婦婦 婦出出萬 ш ш 戰 人會 粉が 人會 人會 人會 體で來て 愛の眼に 發 蓌 颜 地 1 にの カコ と一際高 一月二十一日 どう 互 勝ち拔 世 未 母へ ら夢で好かつた便りが來 萬 削 E 帶 席 事賴 夜 子供に 言ひきかせ 上手 征った も同 喧し 何やら云ひたそう 美しき富士の山 ts 1. 0 じ墨手の禮 3 と依頼され モンべなり 子 話 媚 Ш 人會 闡 < い秀翠山糸青 媚 湯 朗 同 雨 製 泉 舟

入犯 眉大そ良 をも 臣のい 雜川 の私 二月二十五日 舊友とわかつた 日の悩み む と聞いては來たが眞暗だ の夜道一番こわいと 用で 腕 ^ 闘鷲の時間ぐる 來るもあの騒ぎ 句會 市一 龜抱初 遡 曲

桂

水逸舟 丸葉

聽

T

派手好みそも(虚女と言ふ岩さ バスガール機女とも見えぬ盛を上げ 式終へて 足袋拔ぐ膝も 魔女として 女會 関に 房 活 E 1= 4 動めて處女のまゝ老ゆる 0 追 幹事嬉しくやめて嫁さ 處女の誇りを匂はせる れ娘は嫁きおくれ 未 蝶 抱

男

小 郡支部句會 《四口縣

逸

味虫老 女 奥 奥 初 中難など」奥様もう言はず 標 汁へ 眼镜外した 鏡戰果 の手も境産の 掛けねば鄙めぬ本が殖え 喰 一月二十四日 ま ぬ鯛 の島へ忙がしい だ、度胸が定まらず 0 於臧道俱樂部井蛙報 まめが出來 置さどころ 列に立ち 市多樓 市多樓 井 凡 泰 蛙 骨 蛙 平

あざみ婦人句會(大阪)

支那 妻の 機散るしく乙女ごころにさからひて ハキーへと言へる長女で母 父 一 人 護 死ぬとこが 刀 女 肩 は 1 を 海 4 三月十一日 かりて 花 ŀ 杖に 圧で とが本當に出來るひた祭 H を 便 奏長女孔雀のように出る 何處であらふと日本人 b 父の を 眞下に 見るところ b つて長 越えて日本の嫁が來る 赤道 吹 櫻 ハイヤー 戰 雪 0 相手の出來る酒 日向を歩ける日 地 創立五周年紀念秋子報 女嫁がぬ気 0) 下で撮 越 便りする 下で揺れ すところ 趣にする ゆかり 加代子 ひさみ ひさみ 美代子 萬龜子 初 順 秋 花 枝 子 子 月 美

> 大 巢

> > 父 さん のカメラが迷ふ花の下

にランプで置んだ頃懐ひ

エスカレータ

邪魔になり

米 神も 階 置 切り下げた 生活へ春が やつて來る をどり場に下駄を重ねた二階借 小料理器二階 持てるだけ 慾 看 お産日を待つほど切符使ひ果て 仲人は 百 衣料切符 あるはあるけど 金が要り お手紙は此處に置きます段梯子 段 悪友の 故 切 良 經かたびらも衣料切符はいるのなり 衣料切符と云はれて戻るあばてやう 衣 金 護婦 張 張って小猿は先に逃けて行く に生き う一つ 釣つて臨ると雨に濡 興 英 人の 回札 裁は階 梯子降りてはまづい 下の首尾 專 下 料 の要ることは云はずに五百點 符さへ L. の贈 費ひ の滅ぶ日を見て死にたがり b 近く 切 の方がキレイな事を云ふ 眞價を見せる五十過ぎ の笑つて段を轉げさり 切 見せたが切符ないのなり 一月二十四日 外には切 切符のことを繰り返し 持つてるだけで 貰つて來たと 汗をふき 段の下返來でるなり \$ に階段二段づく上る 慾に 去り行く人生か あればと娘あきらめる 衣 符で忌 切符の足らめ春であり お妾さんを 說 避 料 敦 産の一つにて へ急な段をつけ 切符を肌につけ 聞き/ 明 氣が强し 用がなし 暗くする 配るなり 同同同同春 一同同同 柳 同 同 利 同 正 柳 栞 正 青一路 同 同同 路 春 同 正 柳 同 利 柳 生 秀

光

生

甫

坂屋俱樂部 111 柳會 (大阪)

餅

細

から届く

籬

てある男職

電

職場の智慧のありつたけ

二月七日

面

人報

翠

製

光

Z

平

香 同

林

単 甫 光 節 非常 手 節節 電 節 節 機 節 家を出て十年 住 移 こんた納屋あるを家主はくり返へし お真 出 漬 組頭はかく 南 貸 まだ祖父は 燈料 小灯 つ為 きた家 訣 鯛な 電 電 械 物 轉して か 鄜 と云 にろ 用 へ夜 事 0) 0) H をば優しく拭いた節電日 め顔 H 題さ器 札はげば ファンとルンペン 空を見る 暗さも花嫁まかしかり 赤 七 减 から 額暗幕の釘を 0) 隊長室の灯 0) 隣 天 一闘へり節電の ふに電髪ちょらかし ٤ くらさになれた豪所 りの つて女中も顔が立ち 濟むだら消そう母の整 ち 階 學も一寸早やじまか 1. 才 女 隣 灯 の乗場が 迄 電 中 ٤ 蔽 0) のハイ 燈 家にあかり込み 幕で いま 屋 順 ふ遊 堀の物語 遠くなり 威 が消され 街をゆく 後 キング 猛 ZX

同

郎

同銃

同 聖

司

也

哪

生 秀

生

借家探しほこりだらけになっただけ み 馴れた ばかりへ 辭令又下り 荷してまづやれーへと釘拾ひ きならと氣のない返事され 先知らさぬ友を憐れめり がすんで無情な針の音 空 禅ばかり 納屋にあり 働いてくれる 納屋の中 荷物にもたれ煙草吸ひ 屋も出來たる隣組 新聞いかどです 二人の題さなり 貸家聞いてゆき だ配選夫 打ち

> 同 罂 同

> > 司

不

小 手 才を訪へば 才 先 一月七日 办: 小 利 く天 名刺が貼つて有り 才 の佗住居

天

首をさしのべきしのべ丸薬吞み込めず 藥 行 煙 丸藥死 は 0) 0 机の隅 つもり まだに 0 誘惑が招いてる 丸栗飲んである 丹 へ忘れら か 手雕せず

同

浪

生

一々庵

生々庵 不 好 孤 郎篷

異性 リボイド及び脂肪を主 本劑は非特吳免疫學說 力を有する異種蛋白、 に準據して高度の免疫

忘 好 香

郞 夢

是鹽 砍交-体とせるものなり。 發賣元 韓式黑田藥品商會 (適應症找罪) 法師單、奏劾迅速、價格至 注射無痛、關作用絕無、 し置汎に辿り著効を要す。 性、並に化願性諸疾激に對 性、炎術性、傳染性、敗血 得辦、其他各科、急性、 後、扁桃腺炎、中耳炎、產 流感、各種肺炎、肋口 三名 图图 一名二〇管人 一名三〇管入 二〇五管入 夢 118100管人 二〇〇管人 大阪・東京

生々庵

渡

同勢 寒 渡

三

深

を女氣に

L

た、箸を取り

む癖

\$

先代そのまんま

月十二日

啜 M を

むは、まだ名案が出ぬらしい

の爪は竹のよな

同 靑

喜

由

金 訓 紙 日

ビリで來た子の汗教師。拭いてやり 再圖 面とれ 眼鏡かけず 氣苦勞してる 婚期なり ケーブルが 御鞭撻を 乞ふと止まざる 筆を執り 青春 謳歌 芝生 もえるに忙しい芝生の向うにも 二個連れ 三個連れ 父さん ケーブル ケーブルで ケーブルにあなたまかせで腰をか ケーブルの お菓子みな喰べたが丸築そのまんす んなより落伍が先に闘つて居 伍の身陽はさんしくとふりそそぐ 伍 眼 伍 伍 征 壯 閣 腦 臩 寒 0) そろ 0) 柑 者 L 組 化 鏡 を 眼 ば は八時間 か 丸 丸 7 T 0 を は 同 いつそ大気へ 0) をするときめてる 五十過 ガ 送る若さの すでに喜の壽を 0 バッヂへ 若さ 取り 歌芝生もえるに忙しい 驗 變 一つかみ程も飲んで居る 母不 土産談のトップに出 相濟みません神脂で 尻目にかけて 故障車内は息をのみ 網 な顔で殿りテープ切り 伍 運 士は同士で氣焰擧げ ダルカナルへ固座吞み 若さ體操 老 から人生がわかりかけ まだ嫁がずに家に居る 5 一本へ目をそらし 顔ぶれ きまつてる をさけてる落伍組 0 たらしい鈴の音 年 器 一字で解決し 用 組があなどれず ちやと立つ若さ 腰ころびぬ 手のリズム ネタが知れ 腹を立て 越えし人 指 行者行き 封を切り 線響 美奈子 生々庵 博 香 好 久 孤 Z 同 弧同 嶺同香 同同 美奈子 寒 同 同同 不 生 Z 同 好 久 同 罂 寒 嶺 一々配 245 鑑 郎 行 也 遜 泉 平 林 林 郞 行 司 泉

> 答 問答無用下役は首に成り答辯の出來ぬリュックをとがめられ 生 卽 目 氣の毒なほど 窓のある ガラス拭き 答 否 質 病 ビルの窓タイピストらしい顔が出る 返事 は窓 雑も 問 辯 辯 答を避 室の窓に女の肱が見え の限りにあらず親爺だぞ に へ逆襲 0) は 一月二十五日 E 別 咽喉でとめたる機密あり 至誠に 窓 醋 金 一月十七日 に考へあるらしい けて一杯飲みませら あつて話も聞いてある へべっつく 子 0 値 をして監を撫で 障子の借 打 燃えて日程 於雨月居 に扱 於クラブで室 町 家也 I は す 同 同 同 鲵 同 同 靑 銳 報 美 美 de . 4

赤檀吠えろ」も「伏せ」も命のまる 女狀質國熱水滿葉 芝 獨 差 4 練 向 境 海 洲から り日 金 から、來た給菓書に名が二つ い返 居うしろはねむる日向ぼこ もう春のきざしを感じさせ でも出しナと願で別れられ 訓練 署長ともかく へ老師葉書ためらひぬ 0 綸 事はがきで二行 端書 向も知らず死んで行き 禮は一錢でいうて來た 葉書 元氣ですとあり 米でも 一本來たまくだ 歯が 褒めて置き 青 同 同 同 同 同 同 同 靑 鲵 美 K 美

> 行くしは引く氣の電話借りに行き もう出來てゐるへ 結納 こそばゆし

築 同

B

納

0)

日からかづらと既に極め

没

貧子 子

靐

曲

娘覺

悟は 出來て 居り

文 方

Œ

取次の電話アッサリことほられ 出た途 端 もう切れてある借電話 話 借 借賣 本降りになつて 電話が 2 借 借 0) 電話 上げを 中 電話か十方の気になつても見 話 すぐゆきますと切つておき 聞かせてならぬ 金も 弱氣の買ひを 逢ふて からだと借電話 知られたくない借電話 間 お 拂はぬあばてやう 世 辭の 聲になり 同同 同方

居日 梯 タラップをわけなく降りるハイヒー 踏 梯子乗り モンべがつしり 腰を据え 强 曜日 候 子 情 情 な次 梯 外 段 は 子 にらんで時計の 梯 梯子へ 凄の 0 子 男は樂に 方 を借りる用が出來 を引 T 一高 天翔 受 音を聞く 大儀なり る る 同路 銳 丽 靑 同

お話市が消

電話逢ふ電話なぞよそでかけ

借

電

話

符

課

C

用 句

聯

生

於攤萬

牛

叉 音 大阪遞 仁 合 一月十六日 圖 の時刻ついに來た 病院川柳會 (大阪)

事度借組女 社参邸電飲退借談務 本電長電長房を卷宅話記録記記 の 退をを借電話を 当 る の 要 が 要 り 電話 を 変 変 が 要 り 電 が 要 り 電 が 要 り 電 が 要 り 電 が 要 り 電 が ま か 消 電 か ば り 深 社 か 消

b 深社

邸 (0)

ば返す株なり電話なり

借借電開事度 電話け務々 電話
瞬
り
は
御機嫌悪くなり
け
た
て
の多さ気になる借電話

結結結結兄結置轉遁有三交爆

走

後に殘つた時計廢 どこで見るのか腕時計

邪

既 に なつてる大時計

竹文榮同

の 空 氣 をみだ子借電話

00 砂 點

時

計修

繙

中とあ

b

納

話 九 軒がみんな借り 話れ軒がみんな借り

電話は一寸借りられず

兵隊の口

問なり

の狂ひを直し遊ぶ身の

方

納も 時計 業に

遊もあるか

と駈落し

獨

おいて霽しやは一覧る時間

納も國債と云ふ戦 嫁として結納の

時 型

同

世話もやき

買はれたのではない妾

爭 方 さが强さが K かかはりのない「椰子の月 夜 とだけある軍事便 南 作る大職果 -行く げ を 多幸平 よしえ 報

麥献獻献献献 戰 南 チームの來ぬ き戰 ÷ 戰 金 金 金金 金 サクまで 参戦させた 資け戦 の日から 煙草も一つ減し 並は 女 房 笑つて 出して臭れ 並の つ よ だ 節約の 餘地があり が ら 煙草も一つ減し う家 方 亦 まで参戦させた資け戦 を 参 商賣と違ふ氣前見せ 月十七日夜 略 羊戰 に に悟 和 となりでが更ける 節約の餘地があり 笑つて 出して臭れ 闘る 違ふ氣削見せ る 於ひろし居ひろし報 四十過ぎ 雨武 多々良 鸭 町 町人 雌

竹同閘卓

夫

Œ

版が纏って借電話 別出るまで隅で待ち 窓で電話借る 電話 同同是同同隔同同同同 同同同同同同同

事幹と部支

廣大今大愛大松松鳥島大厨大 島阪治阪媛阪江山取根阪館阪 芳里文申英柳祥耕織綠鮎最萬 よ _ 郎九庫仙夫太月路州助美修

市機總上家北鮮時間。一大市機總上家部(豐田中文部(豐田中文部(豐田中文部(豐田)、一大市職文部(大大市職文部(大大市職)、一大市職。 尼岡堺布 崎山支哇門島 支部部會 布大大 美九角魔器秀春天柳美华紫久 米 知 花 夫坡堂置芳溪巢作路笑休香雄

> 福住花津神仁熊小大 一池染料支部(大牟田 岡吉園山津多本郡洲 支支支支支支 支部部 夢詩妄一香一水井椋蝶賢

裡朗夢將林聲源蛙影人次

田米川龜大大沖島 村村村井谷島野 Ш 孝あ花品花湯三一 岩 介馬菱修村明郎步 末淺額朦朦長長長田嘉笠片岡大長池 崎中納原岡本道 澤 # 川 晴太柳辰 路直一弘 太 即一嚴助作濱郎秀二純生方平雄徹居

骊 助 生 路 郎

主

銓

前古戶中川石戶高大寺岩奧永西福高橋 山川倉島出井田澤西井崎村田田田橋本 生美白血・八銭柳丹十門雨は緑 海竹天庵子人篷浪歩々路路九樂樓る雨

森藤蛭篠柴削安山窪生高谷 里子原谷田川本田方尾脇 久 宰 銀 東好省春二五留雨波敏亮素 魚古二雨即健美迷樓即雄文

吉米西藤橋平田大水三內米藤岩古 北岩岡丸黑正原中石宮須妹吉市村 田本川岡本佐中坂谷輪藤本 西曾岡崎尾田場お根ムース 松 川崎田尾川本 五本加至波 至波 英 儀青藝夢平雨形 島 脱 一志 友 山 花 お根 八 没夢さ民白豆九水食夢 春松某潮紫水史 **巢代人花香客風む郎峰秋瀟車子裡** 雷助美瑶造三月水美翠郎子郎石麗

小谷阿岩國際高月鈴夷植逸鈴多中西小清清清魚菊杉好濱中田櫻西關押佐尾布 山見木田內川畑水水水住澤原崎田原中川尾根谷竹崎施 月風的虹休彦逸明鹿笑天竿坡樓芳水浪子路帆潮麗子仙雄人葉水栞彦を子正川

水鹽吉橋福木中池伊乙岡宮野長田小松福村長水明八井河上武谷德河浪野小飯酒 谷谷田諸田下村水田谷島田元谷邊川浦井上野谷石竹上田田部口永野鰕木 琴好阿東妄幽聖湖伊乙嶺不吐三由觀帆 角井竹柳正湧一零香綠雅夜之柳恆與知 水坊曬雀夢王司心古平泉二空司布堂船哲堂蛙莊衣柳三將光 林葉 美王介太 明史夫

澤

小 銳

松園

昭和十八年

月十五日印刷

A

選選

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事。 ▲整體はなるべく楷書(川柳錐誌原稿) と封筒に朱記の事。 ▲都切は骰守されたし。 ▲『川柳塔』への投句は不朽洞會員に限め、住所氏名雅號を明記する事。 人型の原稿紙に各種各題必予別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。 ▲投稿其他につき御問合せはすべて返信

文章 (評論 同舟近詠 同舟近詠 将((評論研究感想吟行漫文漫畫) 廿雜 集 句吟 報 生 路 路 郎 郎 選選

月廿日 (十旬以內) 多田 締 切 田 市多 眉 丈 樓 選選

水腕

四月廿日 月出 H 六 十句以內 締 正池 切 切 本田 水可 客宵 選選

集

募

者本送名氏所住

下されば郵税を奉仕して直接競会致し★年號、職線の勇士に送られたい方は 日本出版配給株式會

社

會協化交版出本日 五八〇四查壹 號番員會

規

定

配給元 日本出版配給株式東京市神田區淡路町二丁目九番地 行即關人 麻 生 去 行所 が 川 柳 雑 誌 計 電話土佐期 八三 一丁月四六番地 亍社

告 農告部へ御一報下さいますやう。 本誌廣告に御用の節は川柳雑誌計

昭和十八年 體新聞紙法に據る 禁無斷轉載 PH 本誌の刊行は有保 月 日酸行

價 定 の事。 ひます。御註女は何月號よりと御指示師 (大阪七五〇五〇)又は小爲替を御利用顧 外国送本には海外郎送料質費の加算を包含 半ヶ年・六册 ケ年・士册 册 轉居又は改號等の節は舊新併記 振

瞽

規格判B列5號 柳 毎月一回 雜 誌

第第 四丁 號卷 して最適

料品・菓子等の容器と 組立式各種・薬品・食

角形・小判形・

紙



大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地

代表的國産カメラ

プロニー 16枚撮り

■ F4.5付 ¥ 117.00

F3.5付 ¥ 141.00

¥ 21.00



(カタログ呈 要郵券十銭

大阪市南區順慶町四丁目電話船場905·1905·1396·5095番

縮を容易ならしめ「安産」
はカルシュームを補給し
て諸病を防ぎ、子宮の收

導くことにあります。

工器解析用

盯

漫畫三十二集挿入。

戶田孤篷著·麻生路郎序 街の難音(賣切)大 一人の創作・詠史川柳の尖端をゆ 空(賣切) 人の一代(夏切)

脈生路郎著

不離の呼程がしてある。 一著·序女 麻生路即·百田宗治 りの名句を蒐め、 定債の・八〇 その一句一句に、不即

の大牛は高鷲遊鈍のペンネムー 200

丁二通岸海島出市堺

所行發

大阪道修町

田 卯助商店



片瀬醫學博士述



SENRYU ZASSHI No · 2 3 1

Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Nippon.

むま止して ち撃

楠

(高野線長野驛下車) 在剛山頂葛木神社

住民主心 第二十三一 党 大正十三年三星三貫第三盟縣便物 認 町(毎月一回一員發行)

一般 定價 金三〇〇 送料壺鏡

お菊松―砂川園驛山手線長瀧驛―瀧

池

蹟

お成錬

コース

į į

沿

南